

おげきこる山路の人もまらきくに我心のみつねにゆくらん
圓融院御時少將更衣のもとにつかはしける

限なき思ひの空にみちぬればいくそのけふり雲とあるらん

御かへし

空にみつおもひの烟雲とあらば詠むる人のめにぞ見えまし

題まらず

讀人まらず

思はずのつれなき事もつらからじ頼めば人をうらみつる哉
つらけれと恨むる限有ければ物のいはれでねこそあかるれ
紅のやしはの衣かくしあらば思ひそめすぞあるべかりける
はのかにも我をみしまのあくた火のあくどや人の音信もせぬ
延喜御時承香殿女御の方かりける女にもとよしのみこ
まかりかよひ侍りけるたえて後いひつかひしける

承香殿中納言

思はずのつれなき事もつらからじ頼めば人をうらみつる哉
つらけれと恨むる限有ければ物のいはれでねこそあかるれ
紅のやしはの衣かくしあらば思ひそめすぞあるべかりける
はのかにも我をみしまのあくた火のあくどや人の音信もせぬ
延喜御時承香殿女御の方かりける女にもとよしのみこ
まかりかよひ侍りけるたえて後いひつかひしける

芥川羅波とよに津の區也

人をあくにその色
紅の灰汁に色
かへる物なれ
かへる物なれ

人をとくあくた川てふ津の國のきにい違ひぬ物にぞ有ける

題まらず

讀人まらず

限なく思ひ初てしくれあるの人をあくにぞかへらざりける
ありそ海の浦とたのめし浪残きみ打寄せてける忘れがひ哉
つらけれと人にいひつ岩見瀉恨多ふかさこゝろひとつに
恨みぬもうたがひしくぞ覺はゆる頼む心のあきかと思へば
近江ある打出の濱のうちいでつゝうらみやせまし人の心を
わたつ海の深き心の有あがらうらみられぬる物にぞ有ける
數あらぬ身の心だにあからあむ思ひまらずの怨みざるべく
恨みての後さへ人のつらからばいかに言てかねをもあかまし
小野宮ればいまうち君につかひしける

圓院大君

君を猶うらみつる哉あまのかる藻にすむ虫の名を忘れつゝ

もにすむ虫の我
からなふ

拾遺和歌集卷第十六

雑 春

題 玄 らす

凡河内 躬恒

春たつと思ふ心なうれしくていまひととせの老ぞそひける

讀人 玄 らす

新しき年のくれをもいたづらに我身のみ社ふりまさりけれ

新しき年にのあれども鶯のさく音さへにのかりらざりけり

北宮屏風に

右 近

年月のゆくへも玄らぬ山がつい瀧のおとにや春を玄るらん

延喜十五年齋院屏風歌

紀 貫 之

春くれは瀧の白糸いかなれやひすべども留あまに見ゆらん

瀧の音ハ春立て
氷さけておつる
瀧の音也
むすへとも猶云
々ハ結へとも猶云
氷さハ見えて池
結句案集にあわ
らんさわ

正月に人々まうできたりけるに又の日のあしたに右衛門
門督公任朝臣のもとにつかひしける

中務卿具平親王

わかざりし君がにはひの戀しさに梅の花をぞ今朝の折つる

あがされ侍りける時家の梅の花をみ侍りて

贈 太政大臣

こちふかバ句おてせよ梅の花あるじあしとて春をわするあ

もゝどの、齋院の屏風に 讀人 玄 らす

梅の花春よりさきにさきしかとみる人まれに雪のふりつゝ

題しらす 中納言安倍廣庭

いにし年ねこじてうゑし我宿のわか木の梅は花さきにけり

天曆御時大はん所のまへにうぐひすのすを紅梅の枝に

つけてたてられたりけるを見て

根こしくは根な
ら掘りての意
也

手なふれそ
は唯手なふれそ
の意也
御いしは帝の御
椅子也

七のみは四位
貞辰親王也
集嗣也
御六十賀
御息所
ひける時
あり給

一條 攝政

花の色わかず見るとも鶯のねぐらの枝に手あふれそも
れなと御時梅花のもとに御いしたてさせ給て花宴せさ
せ給ふに殿上のをのことも歌つかうまつりけるに

源寛信朝臣

折てみるかひもあるかき梅の花今日九重にはひまさりて
内裏の御遊侍りける時

参議 伊 衡

かざしての白髪にまがふ梅の花今いづれをぬかんとす
清和の七のみこ六十賀の屏風に

貫 之

数ふれどおぼつかあさをわが宿の梅こそ春の数をえらるらめ
題えらす

題人 えらる

年毎に咲わかはれど梅の花あわれある香のうせすぞ有ける
醍醐院御時三尺御屏風十二帖歌の中に

かりに假に狩
なかれたり

源 順

梅が枝をかりにきて折人やあると野への霞の立かくすかも
北白川の山庄に花のおもしろくさきて侍りけるを見に
人々まうできたりけれバ

右衛門督公任

春きてぞ人もどひける山里の花こそやせのあるじありけれ
くらまにまうで侍りけるをりに道をふみたがへてよみ
侍りける

安 法 法師

ればつかあくらまの山の道しらで霞のうちに惑ふ今日かあ
延喜十五年齋院屏風に霞をわけて山寺にいる人あり

紀 貫 之

思ふ事ありてこそゆけはる霞道さまたげにたちなかくしそ
小一條のねやいまうちぎみの家の障子に

よ しのぶ

田子浦ハ駿河國也

たらしこそきけ
ハ立開く人しあ
らんとの意也
人に物いふさハ
他人と語ふと開
きての意也

あさるハしこむ
るの意也おほす
ハ負すに生すな
かけたる也

十旬なつさはま
くさいはん為の
序也

田子の浦に霞の深く見ゆるかおもしはの烟たちやそふらむ
山里に忍びて女をゐてまうできてある男のよみ侍りけ
る
よみ人まらず

思ふこといはでやみあん春霞山路もちかしたちもこそきけ
人に物いふとさゝてどはざりける男のもとに

中宮内侍

春日野の萩のやけ原あさる共みえぬさきをねはすある哉
女の裳着になづさの花につけてつかひしける

藤原長能

雪をうすみ垣根につめるから薺あづさのまくのゆしき君哉
東三條院御四十九日のうちに子日いできたりけるに宮
の君といひける人のもとにつかひしける

右衛門督公任

たれによりハ誰
か爲の意也

たれにより松をもひかかん鶯のはつねかひなきけふにも有哉
子日
恵慶法師

引てみるねの日の松の程なきをいかで籠れる千世にか有覽
題まらず
讀人まらず

まめて社千歳の春のさつゝみめ松を手たゆく何かひくべき
齋院子日
またがふ

一もどの松の千歳も久しきにいつきの宮をれもひやらるゝ
右大將實資下臈に侍りける時子日しけるに
清原元輔

かいるみゆきの
家集にかいるれ
のひさあり

老のよにかゝるみゆきの有きやと木高き峯の松に問とバや
正月叙位のころある所に人々まかりあひて子日の歌よ
まむといひて侍りけるに六位に侍りける時
大中臣能宣

松ちらばひく人今日のありあまし袖の緑をかひあかりける
除目のころ子日にあたりて侍りけるに按察更衣のつば
ねより松を箸にてたべものを出して侍りけるに

元 輔

引人もあくてやみぬるみ吉野の松の子の日をよそに社さけ
康和二年春宮藏人にありて月のうちに民部丞にうつり
て二度よろこびをのべて右近命婦がもどに遣ひしける

玄 九 が ふ

もろや二つの
矢をいふそを射
當つこの意也

ひく人もあしと思ひし梓弓いまぞうれしきもろや玄つれば
題えらす
ささし時猶こそ見しかもゝの花ちれば惜くも思ひありぬる
帥のみこ人々にうたよませ侍りけるに

讀 人 玄 九 不 ず

弓 削 嘉 言

山里の家居のかすみこめたれどかきねの柳すゑのしに見ゆ
春ものへまかりけるにつばさうぞくして侍りける女ど
もの野邊に侍りけるを見て何わざするぞとどひければ
どころほるありといらへければ

賀 朝 法 師

春の野にどころ求むといふあるの二人ぬばかり見出たりや君
かへし

讀 人 玄 九 不 ず

さころの野老に
所をそへたるな
り

春の野にゆるくみれどあかりけり世に所せき人の爲に
題えらす

讀 人 玄 九 不 ず

かきくらし雪もふらあん櫻花まださかぬまのよそへても見ん
春風の花のあき間に吹はてね咲あべれもひあくてみるべく

躬 恒

さかざらん物とあしに櫻花ねも影にのみまださ見ゆらん

なき物くさひ其
外の我宿になき
物なりさしほし
さひ思はすこの
意也

御厨所朝夕の御
膳を供する所也

いづこにか此頃花のさかざらん心からこそたづねられけれ
讀人 玄 らす

延喜御時月次御屏風のうた 躬 恒

櫻花わが宿にのみありとみバあき物やさなれもいざらまし
さくらの花のさきて侍りける所にもろどもに侍りける
人の後の春はかに侍りけるに卯の花ををりてつかはし
ける 讀人 玄 らす

諸共にをりし春のみ戀しくてひとり見まうさ花ざかりかな
みづし所にさふらひけるに藏人所のをのことも櫻の花
をつかひしたりけれバ 壬 生 忠 見

諸共にわれしをらねバ櫻はあかもひやりてや春をくらさん
ある人のもとに遣ひしける 御導師淨藏
霞たつ山のあなたのおくら花ねもひやりてや春をくらさん

題 玄 らす

貫 之

貫之 東詞書に
院御屏風に
木のしとに休
て河つらに櫻
花見たるさあり

をちかたの花もみるべく白浪のともにや我も立わたらし
春花山に亭子法皇ねいしましてかへらせ給ひけれバ

僧 正 遍 昭

さてといのいとも畏し^{かしこ}花山に玄ばしとかかん鳥の音もが
京極御息所春日にまうで侍りける時國司のたてまつり
ける歌あまた有ける中に 藤原忠房朝臣

鶯のあきつるあべに春日野のけふのみゆきを花とこそみれ
ふるさどにさくと侘つる櫻ばな今年予君にみえぬべらある
春がすみかすがの野邊に立わたりみちても見ゆる都人か
圓融院御時三尺御屏風に花の木のもとに人々あつまり
ゐたる所 兼 盛

世中にうれしき物いおもふせち花みてすぐすこゝろ也けり

清慎公家にて池のはどりの櫻の花をよみ侍りける

元 輔

櫻花そこある影ぞをしまるゝまづめる人のはるとおもへば

上總よりのぼりて侍りけるころ源頼光が家にて人々酒

たうべけるついでに 藤原長能

あづまぢの野路の雪間を分てきてあられ都の花をみるかあ

清慎公の家のさぶらひにともし火のもとに櫻の花を折

てさして侍りけるをよみはべりける

兼 盛 弟

燈のしさに日本
なかけたる也

ひのもとにさける櫻の色みれば人の國にもあらじと思ふ

山櫻をみ侍りて 平 公 誠

み山木の二葉みつばにもゆる迄消せぬ雪と見えもするかあ

こんぐうち侍りける時に畑やき侍りけるを見てよみ侍

こんぐは金鼓に
て和名抄にひら
かれみ訓めり

藤原長能

かた山に畑やくをのこかの見ゆるみ山櫻のよきてはたやけ

石山のたうのまへに侍りけるさくらの木にかきつけ侍

りける 讀人まらさ

うしろめたいかで歸らん山櫻あかぬにはひを風にまかせて

敦慶式部卿のみこのむすめ伊勢がはらに侍りけるが近

き所に侍りけるに瓶にさしたる花をおくるとて

貫 之

久しかれあだに散ちと櫻花かめにさせれどうつろひにけり

延喜御時南殿にちりつみて侍りける花をみて

源公忠朝臣

殿もりのとものみやつこ心あらば此春ばかり朝きよめすあ

題まらさ 讀人まらさ

このしりハ主殿
察の伴氏の御奴
にて禁庭の掃除
なまなす役也

瓶に急をかけた
る也

詠めに長雨をか
けて下句ふるさ
いへるなり

櫻花み笠の山のかげしあれバ雪とふれどもぬれじと予思ふ
年毎に春の赤がめいせしかども身さへふる共思ひざりしを
年毎に春にくれども池水はたふるぬなひたえずぞ有ける
三月閏月ありけるとし八重山吹をよみ侍りける

菅原 輔昭

春風のどけかるべし八重よりもかさねてにやへ山吹の花

屏風の繪の花のもとにあみひく所

浦人のかすみを網にむすべばや浪の花をもとめてひくらん

延喜御時御屏風に

貫 之

やなみれば河風いたく吹く時ぞ浪の花さへれちまさりける

亭子院京極のみやす所にわたらせたまうて弓御覽じて

かけ物いださせ給ひけるにひげこに花をこき入れて櫻

貫之集に洞書梁
さあり
梁には魚のむち
さまる物なれば
かくよめり

くはせ口にくは
へさせたる也

をどぐらにして山すげを鶯にむすびすゑてかくかきて
くのせたりける 一條のきみ

木の間より散くる花をあつさ弓えやいとめぬ春の形見に
ひえの山にすみ侍りける頭人のたき物をこひて侍りけ
れば侍りけるまゝにすこしを梅の花の儘に散残りて侍
る枝につけてつかさしける 如 覺 法 師

春すぎて散果にける梅のはあたゝかばかりぞ枝にのこれる
右衛門督公任こもり侍りけるころ四月一日にいひつか
ひしける 左 大 臣

谷の戸をとちやはてつる鶯のまつにおどせで春もすぎぬる
かへし 公 任 朝 臣
行かへる春をもえらす花さかぬみ山がくれのうぐひすの聲
四月朔日よみ侍りける 元 輔

下句閑なる心を
思ひ煩ふさの意
也

春のをし郭公はたきかまやし思ひわづらふまづこゝろかき
延長四年九月廿八日法皇御六十賀京極のみやす所のつ
かうまつりける屏風の歌藤の花 貫 之

松風のふかむ限の打はへてたゆべくもあらず咲ける藤をみ

延喜御時藤壺の藤花の宴せさせ給けるに殿上のをのこ

とも歌つかうまつりけるに 皇太后宮權太夫國章

藤の花宮の内にはむらさきの雲かどのみぞあやまたれける

左大臣のむすめの中宮のれうにてうし侍りける屏風に

右衛門督公任

紫の雲とぞみゆる藤のはないかあるやどのまゐるしあるらん

讀人まらま

紫の色しければふぢの花まつのみどりもうつるひにけり

題まらず

人 磨

郭公かよふかきねの卵の花のうきことわれや君がきままぬ

屏風の繪に

重 之

卵の花のさける垣根に宿りせしねぬにあけぬと驚かれけり

みちのくにまかりくだりて後郭公のこゑをきいて

實方朝臣

としをへてみ山がくれの杜字きく人もあきねをのみぞあく

女のもとにまろき糸を萱蒲の根にしてくすだまをねこ

せ侍りてあはれある事どもをあるをどこのいひおこせ

て侍りければ 讀人まらず

聲たてゝあくといふども郭公たもとのぬれじそらね也けり

廉義公家障子に 元 輔

かくばかり待とまらばや郭公木老えたかくも鳴わたるかき

題まらず 大中臣輔親

そられば虚音の
意にて糸を萱蒲
の根にとたれハ
まここのねなら
ぬ心をそへたり
待とまらばやハ
我待つと知りた
らハ郭公の近く
もなくへきをの
意也

奈良志岡の大和國也

北方ハ藤原公の北方にて三品代明親王の女贈皇女御也
大荒木森ハ山城國也古今集に大下草老ぬれハ駒人ナシとあるる本歌にてよめ

あし曳の山はとゞぎす里かれて黄昏たそがれときになのりすらしも
坂上郎女につかひしける
大伴 像 見

ふる里のちらしの岡に郭公ことづてやりさいかにつげきや
螢をよみ侍りける
健 守 法 師

終夜もゆるやたるを今朝みれば草の葉ごと露ぞねきける
延長七年十月十四日もとよしのみこの四十賀し侍りける
時の屏風に
貫 之

とこあつの花をしみれば打はへて過る月日の數もえられず
一條攝政の北方はかに侍りける頃女御と申しける時
贈 皇 后 宮

まばしだにかげに隠れぬ時ハ猶うあたれぬべき撫子のはち
題えらす
躬 恒

いたづらに老ぬべら也ねやあらしの森の下ある草葉あらぬを

拾遺和歌集卷第十七

雑 秋

屏風に七月七日

源 順

棚機ハ空にえるらんさゝがにのいとかくばかりまつる心を

圓融院御屏風に七夕まつりしたる所にまがきのもとに

をとこたてり
平 兼 盛

織女のあかぬ別もゆゝしきを今日しもなぞか君がさませる

七夕後朝にみつねがもどにつかひしける
貫 之

朝戸わけてあがめやすらむ棚機のあかぬ別の空をこひつゝ

題えらす
人 鷹

わたし守はや舟よせよ一とせに二たびきます君ならさくは
七夕まつりかける御扇にかゝせ給ひける

船よせよ一本船かくせさあり

棚機たねのうらやましきに天の川あまの川今霄けふばかりのかりやたまし

の意也のこころ

世をうみては績いせみてにかけたる

天曆御製

讀人 志らす

よをうみてわがかすいとひ七夕の涙の玉の緒とやあるらん
天祿四年五月廿一日圓融院のみかど一品宮にわたらせ
給ひてらんことらせ給ひけるにまけわざを七月七日に
かの宮より内の大ばん所にたてまつられける扇にはら
れて侍りけるうすものにおりつけて侍りける

中務

天の河かはべすいしきたあばたに扇の風をさほやかさまし

元輔

あまの川あふぎの風に霧はれて空すみわたるかさゝぎの橋

同じ御時御屏風七月七日夜琴ひく女あり

源順

琴の音のさぞやかひあき織女のわかぬ別をひきしとめねば
仁和御時屏風に七月七日女の河水あみたる所

平定文

水の紋うねをふりたちてきんぬぎちらし七夕つめに衣かす夜の
七月七日よみ侍りける

藤原義孝

秋風よ棚バたつめにこと問んいかあるよにかあはんとす覽
寂昭がもろこしにまかりわたるとて七月七日舟にのり
侍りけるにいひつかいしける

右衛門督公任

天の川後のけふだに遙けきをいつとも知らぬ舟出かあしも
七夕後朝に躬恒がもとより歌よみてれこせて侍りける
かへりことに

貫之

あひみずてひと日も君にあらねば棚機よりも我を勝れる

習はれば八帯の

遠瀬に慣れぬ
この意も何れ
に君にあはて
日二月に成ぬ
はけさ彦星の
地する哉さあ
歌のいへしなり

題えらす

讀人えらす

ひつまじき妹背の山とえらねばや初秋きりの立へだつらん
天曆御屏風に

も盤やく煙にゑるゝすまの蟹の秋たつ霧も目かずや有らん

三條太政大臣家にて歌人めしあつめてあまたの題よま

せ侍りけるにきしのやどりの花といふことを

源 重 之

ゆく水の岸にははへる女郎花まのびに涙やねもひかくらん

坊の前裁見に女どもまうできたりけれバ

僧 正 遍 昭

こゝにしも何にはほふらん女郎花人の物いひさがにくき世に

題えらす

讀人えらす

あきの野の花の色々とりすべてわが衣手にうつしてしがあ

わたさぬの
さぬの意にて
岡といふより
けたる詞也

題えらす

平 兼 盛

ふき岡の野中にたてる女郎花またさぬ人のあらじとぞ思ふ
圓融院御屏風に秋の野に色々の花さきみだれたる所に
たかすゑたる人あり

賢 之

家苞にあまたの花もをるべきにねたくも露をすゑてける哉
女郎花といふことを句のかみにおきて

題えらす

を倉山みねたちからしあく鹿のへよける秋をえる人のなき

よ しの ぶ

こてふにもにたる物かなはあ御戀しき人にみすべかりけり

あへりにしかりぞあくるうへ人の憂世中をろひさかぬ覽
中宮のうちにおいしましける時月のあかき夜うたよみ

善 滋 爲 政

侍りけるに

うへいかに
の意也

こてふの
いふの意也

結句一本に思ひ
こそやれとあり
月ののりて云々
月の興に乗し
くの意も深し
流るゝ貌也即ち
流水を既ふ意也

並居ては涙居て
閑なる意をいけ
たるなり

九重のうちだにあかき月影にあれたるやせを思ひやるか
延喜十九年九月十三日御屏風に月にのりて翫瀝フ瀝ツ

讀人 志らす

も、しきの大宮ながら八十嶋をみるこゝちする秋の夜の月
八月に人の家のつり殿にまらうせあまたありて月をみ
る
志た がふ

水の面に宿れる月ののどけきり並居て人のねぬ夜あればか

清慎公五十賀の屏風に 元 輔

はしり井の程をまらばや相坂の關ひきこゆる夕かけのこま

題 志らす 曾 禰 好 忠

虫あらぬ人もれとせぬわが宿に秋の野邊とて君のきにけり

人 麿

庭草にひらさめふりてひぐらしの鳴聲きけり秋のきにけり

三百六十首の中に よ した い

秋風のふきあやぶりを我宿のあばらかくせる蜘蛛のすかきを

右大將定國家の屏風に み つ ね

すみの江の松を秋かせ吹からに聲うちそふるれきつ志らす浪

題 志らす 人 ま ろ

秋風のさびく吹ある我宿のあさぢがもとにひぐらしもなく

秋風し日毎にふけば我宿のをかのこの葉のいろづきにけり

朝霧の棚びくをの、萩の花今やちるらんいまだあかなくに

ちかぢありある所に方たがへにわたりてやどれりと聞

てある程にこどにふれて見さくはうたよむべき人あり

ときよてこれが歌よむさまいかでよくみむとれもへせ

もいと心にしあらねばふかくもおもはずすゝみても

いはぬ程にかれも又心みんと思ひければ萩の葉のもみ

ちかぢなりか貫
之の家近隣也
方ナカハ行か
まほしき方た
さりたれば先
さ方へ行きて方
を遠へて其心さ
しの方へ行く也

ぢたるにつけてうたをぢんれこせたる

女

秋萩のまら葉につけてめにちかくよるある人の心をぞみる

貫 之

かへし

世中の人に心をそめしかば草葉にいろもみえじとぞおもふ

人 麿

題まらせ

このころのあかつき露に我やどの萩の下葉の色づきにけり

夜を寒み衣かりがねなくあべに萩の下葉のいろづきにけり

讀人まらす

彼みゆる池邊にたてるそが菊のまけみさ枝の色にてこらさ

天曆御時菊のえん侍りけるあしたにたてまつりける

忠 見

吹風にちる物さらば菊のはち雲井ありとも色のみてまし

そが菊ハ眞菊を
いふ也承和菊さ
つきて仁明帝の
好ませ給へる故
にまかせふ也
てこらさハ石見
女和歌式に春の
くる道こそはの
れ春日山峯の櫛
の色のてこらさ
さありてこらさ
き由の意也
もし風に散る物
ならは地下にて
も雲井の菊を見
らるへきをさの
意也

老が世に云々の
菊ハ草中仙にて
老せぬ物なれハ
也
倉無瀬ハ豊前國
也

ものねたみしける男はちれ侍りて後に菊のうつろひて
侍りけるをつかひすとて 讀人まらす

老が世に愛事さかぬ菊だにもうつろふ色のありけりとみよ

人 麿

題まらす

わきもこかわか装ぬらして植し田を刈て収むる穢さしの濱

屏風におきなな稻はこぼするかたかきて侍りける所に

忠 見

秋毎にかりつゝ稲の積つれど老にける身ぞおきどころさき

延喜御時月次御屏風の歌 躬 恒

蒔てはす山田の稻をほし佗て守るかりいはにいくよへぬ覽

はらへしに秋からさきにまかり侍りて舟のまかりける

惠 麿 法師

を見侍りて

かく山にたてらましかバ汀こぐ舟木も今のもみぢまてまし

題まらず

讀人まらず

行幸も云々の醜
朝天皇の行幸も
ありて御覽すへ
き所也との意也

久方の月をさやけみもみぢばのこさも消きもわさつべら也
亭子院大井河に御幸ありて行幸もありぬべき所ありと
ねほせ給ふにことよし奏せんと申して

小一條太政大臣

小倉山峯のもみぢ葉心あらばいま一たびのみゆきまたあむ

旅人のもみぢのものとゆくかたかける屏風に

大中臣能宣

故郷にかへるとみてや立田姫もみぢのにしき空にさすらん

題まらず

讀人まらず

白浪のふるさとあれやもみぢばの錦をさつゝたち歸るらん

躬 恒

竹河の伊勢國也

もみぢ葉の流るゝ時たけ河のふちの縁もいろかはるらん

齋院御屏風に

内裏御屏風に

清原元輔

田上河の近江國也

月影のたかみ川に清ければ網代にひをのよるもみえけり
藏人所にさふらひける人のひをのつかひにまかりにけ
るとて京に侍りあがらねともし侍らざりければ

修 理

いかで猶網代のひをにことゝん何によりてか我を問ぬと

題まらず

讀人まらず

はふりこがいはいはふ社のもみぢ葉もまめをば越て散といふ物を
九月つごもりの日をとこ女野にあらびて紅葉をみる

源 順

いかあれは紅葉にもまだあかかくにわか果ぬといふ今日を云覽

十月ついたちの日殿上のをのこどもさが野にまかりて
侍るどもによばれて
清原 元輔

秋もまだ遠くもあらぬにいかで猶立歸れ共つげにやらまし
時雨を
能 宣

そま山にたつ煙こそ神無月まぐれをくだすくもどありけれ
十月まがの山まえしける人々
源 順

わやのさうの親
の裏也

冬れやのさうにあひて侍りける法師のもとにつかひし
ける
躬 恒

もみちばや袂あるらん神無月まぐるゝ毎に色のまされば
天曆御時伊勢が家の集めしたりければまゐらすとて

中 務

時雨つゝふりにし宿の言の葉のかき集ひれを留らざりけり

御かへし

天曆御製

昔より名だかき宿の言の葉のこの本にこそかちつもるてへ
權中納言義懐入道して後むすめの齋院にやしあひたま
ひけるがもとよりひんがしの院に侍りけるあねのもと
に十月ばかりにつかひしける

山がつの垣はわたりをいかにぞと霜かれくゝに訪人もあし
三百六十首の中に
曾 福 好 忠

寒さをこふるは
世の寒からん爲
に費るをいふな
るへし

み山木を朝あ夕あにこりつめて寒さをこふるをのゝ炭やき
には鳥の氷のせきにとぢられて玉藻の宿をかれやまぬらん
高岳相如が家に冬の夜の月おもしろう侍りける夜まか
りて
元 輔

女藏人左近集に
源宰相兵衛の假

いざかくてをりあかしてん冬の月春の花にも劣らざりけり
祭のつかひにまかりいでける人のもとよりすりばかま

に小忌に召れて
其青招を朝のま
にせめられたる
藍を重ねるに水
のつぎたれはさ
あり小忌に召れ
てさハ神嘗祭な
とのわさによる
いんや祭の使も
其事なるへし
くなく解く疾
山藍なけ山井に
されるに滞る意ほ
をみにあたりて
ハ新嘗祭の翌日
豊明節會に山藍
にすいふれる山
さるふ小忌の君
達さるふ小忌の
召さるふ小忌の
日さるふ小忌の
の憂也

臨時祭十一月下
酉日賀茂北祭也

すりにつかはしけるをおそしとせめられければ

東宮女藏人左近

かぎりあくどくとひすれど足曳の山ゐの水の猶ぞこほれる
をみにあたりたる人のもとにまかりたりければ女ども
さかづきにひかげをそへて出しければ

よしのぶ

在明の心地こそすれさかづきにひかげも添て出ぬと思へば
右大臣恒佐家屏風に臨時祭かきたる所に

つらゆき

足引の山ゐにすれる衣をば神につかふるまるとぞおもふ
題えらす

讀人えらす

千早振神のいがきに雪ふりて空よりかゝるゆふにぞ有ける

つらゆき

獨寐のくるしき物とこりよとやたびある夜しも雪の降らん

雪を嶋々のかたよつくりてみ侍りけるにやうくきえ

侍りければ 中務のみこ

わたつみも雪けの水のまさりけりをちの嶋々みえすあり行
もとゆひにふりそふゆきの雫に枕の下にあみぞたちける

東宮御屏風に冬野やく所 藤原道頼

さいらびや下にもゆらん霜枯の野原のけふり春めきにけり
まのすのつどもりごろに身のうへをなげきて

貫之

すやハするやの
意也

霜枯にみえこし梅のさきにけり春に我身あんとすや
西あるとありにすみてかくちかどありにありけること
あどいひれこせ侍りて 三統元夏
梅の花にはひの深くみえつるの春のとありのちかき也けり

東宮のいしきどりのいしめしければ三十一をつゝみて
ひとつにひと文字をかきてまゐらせける

讀人 玄ら老

苔むさば拾ひもかへんさいれ石の敷をみあとする齡いくよぞ
賀屏風人の家に松のもとより泉いでたり

貫 之

松の根に出る泉の水なればねあじきものをたえじとぞ思ふ
冷泉院五六のみこはかまぎ侍りけるころいひおこせて
侍りける

左 大臣

岩の上の松にたどへん君々の世にまれらなる種ぞと思へば
ある人の産して侍りける七夜

元 輔

松が枝のかよへる枝をどぐらにてすだてらるべき鶴の雛哉
大貳國章うまこの五十口にわりと調じてうたを繪よか

苔むさば拾ひもかへんさいれ石の敷をみあとする齡いくよぞ
賀屏風人の家に松のもとより泉いでたり
松の根に出る泉の水なればねあじきものをたえじとぞ思ふ
冷泉院五六のみこはかまぎ侍りけるころいひおこせて
侍りける
岩の上の松にたどへん君々の世にまれらなる種ぞと思へば
ある人の産して侍りける七夜
松が枝のかよへる枝をどぐらにてすだてらるべき鶴の雛哉
大貳國章うまこの五十口にわりと調じてうたを繪よか

君々の五みこ六
みこ也

かよへる枝をどぐらにてすだてらるべき鶴の雛哉

せける

松の苔千歳をかねておひ繁れ鶴のかひこの巢ども見るべく
題 玄ら老

讀人 玄ら老

我のみや子もたるてへい高砂の尾上にたてる松も子もたり
延喜御時齋院屏風四帖せんじによりて

貫 之

幾世へし磯邊の松ぞむかしよりたちよる浪や敷のまゐらん
人のかうぶり玄侍りけるに

元 輔

こむらさきたかびく雲をまゐるべにて位の山の嶺をたづねん
天曆御時内裏にて爲平のみこはかまぎ侍りけるに

參 議 好 古

もしきに千歳の事のおほかれど今日の君はた珍らしき哉
五月五日ちひさきかざりちまきを山すげのこに入て爲

かうぶりの元服
したる也
もしきにやか
て蔭中の事也
りさりにまきハ
糸なごにて登き
いふりたる松を

いつかの五日に
何時かなれた

まさの朝臣のむすめに心ざすとて

春宮大夫道綱母

心ざしふかきみぎのにかるこも千歳のさ月いつか忘れん

天徳四年右大臣五十賀屏風に 清原元輔

千歳へん君しいまさばすべらきの天の下こそうしろ安けれ

東三條院の賀左大臣のし侍りけるにかんだちめかはら

け取てうたよみ侍りけるに 右衛門督公任

君が世に今いくたびかかへしつゝ嬉しきことに逢んとす覽

右大臣家つくらあらためてわたりはじめける比ふみつ

くり歌あど人々によませ侍りけるに水樹多佳趣といふ

題を

すみそむる末の心のみゆるかかみぎの松の影をうつせば

ある人の賀し侍りけるに 權中納言敦忠

霜のぬい文選舞
絶賦に聲霜毛而
弄影とあり

ちとせふる霜の鶴をばかきあがら久しき物の君にぞ有ける
清和の女七のみこの八十賀重明のみこのし侍りける時
の屏風に竹に雪のふりかゝりたるかたある所に

貫之

白雪のふりかくせども千世までに竹の緑のあらざりけり

子をとみはたどつけて侍りけるにはあまきすとて

元輔

世中にことなる事いあらせともみはたしてん命あかくば

中將に侍りける時右大辨源致方朝臣のもとへ八重紅梅

を折てつかいすとて 右大將實資

流俗の色にあらせ梅の花

むねかたの朝臣

珍重すべきものどこそみれ

也 霞門山ハ筑前國

つくしへまかりける時にあまど山のもとに宿りて侍り
けるにみちづらに侍りける木にふるくかさつけて侍り
ける

春はもねは春は
もえぬ出秋は紅
葉の焦る事な
いへるなり

春のもえ秋のこがるゝかまどやま

元 輔

霞もきりもけふいとぞみる

春よしみねのよしかたがむすめのもとにつかひすとて

藤原忠君朝臣

ねもひたちぬるけふにもあるかあ

む す め

かゝらでもありにし物を春がすみ

廣幡の御息所内にまゐりて遅く渡らせ給ひければ

くらすべしやの今までに君

と奏し侍りければ

とふやとぞ忍れもまらつる春の日を

よひにひさしうねほとこのもらでねはせられける

天 曆 御 製

さ夜ふけていまはねふたく成にけり

御前にさぶらひてそうしける

まげのゝ内侍

夢にあふべき人やまつらむ

内にさぶらふ人をちぎりて侍りける夜れそくまうでき

けるほどにうしみつと時申しけるを聞て女のいひつか

ひしける

人をゝろうしみつ今のたのまじよ

良 岑 宗 貞

うしみつと時申
ハ一時を丑二
三四と四にわ
る也さて瀬刻傳
士時をば申上る
也

ねそすきにける
 ひて子刻をか
 いひるなり
 引よせひ云々
 思ふ人をひく
 さかくすまふ程
 に名のなほたつ
 める也なほたつ
 つなをへたる也
 上の古今集に花
 の木も今ほり
 うみし春たてり
 さあり
 瀧の公事根源
 此佛生會の推
 古天皇より始
 藍城如來の俱
 ける時天龍下り
 釋尊にあふせ奉
 り事をおいふ奉
 り事をおいふ奉

夢にみゆやどねぞすぎにける

題 玄らま

平 定 文

引よせばたいにのよらで奉駒の綱引するぞあいたつときく

讀 人 玄らま

花の木に籬ちかくの植て見じうつるふ色にひとあらひけり
 夏に扇冬の火桶に身をあしてつれなき人によりもつかばや
 戀するに佛にさるといひませば我ぞ浄土のあるじあらまし
 灌佛のわらひを見侍りて

から衣たつよりねつる水あらでわが袖ぬらすものや何ある
 修理大夫惟正が家に方たがへにまかりたりけるにいだ
 して侍りける就にかきつけて侍りける

藤 原 義 孝

つらからば人に語らむ玄きたへの枕かひして一夜ねにきと

三笠山の大將中
少將の異名也

若かりに來たり
なかけたる也

心ありていなひ
かんの心の意也

ねなは少將かよひ侍りける所に兵部卿致平のみこまか
 りて少將のきみねのしたりといはせ侍りけるを後に聞
 て彼みこのもとにつかひしける
 怪しくもわれぬれ衣をきたるか三笠の山を人にかられて
 玄のびたる人のもとにつかひしける

平 公 誠

隠れ篋隠れ笠をもめてしがあきたりと人に知られざるべく
 とし月をへてけさうし侍りける人のつれなきのみ侍り
 ければいまのさらにもあらじといひて後久しくお
 どづれず侍りければ彼をどこのいもうとにさきくも
 かたらひてふみさをつかひしければいひつかひしける

讀 人 玄らま

心ありて問ふにのあらず世中に有やあしやの聞かまほしきぞ

たつらふの筈也

かたらひける人のひさしうねとせず侍りければたかう
あをつかひすとて

君どので幾よへぬらん色かへぬ竹のふる根の生かはるまで
延喜十七年八月宣旨によりてよみ侍りける

紀貫之

この人をまたに待つゝ久方の月をわかれといひぬ夜ぞあき

柿本人丸

梓弓ひきみひかすみこそすのこを猶ぞよそにこそみめ

春日の使にまかりてかへりてすきはち女のもとにつか
ひしける

一條攝政

也 十市里の大和國

暮バどく行て語らん逢ふ事のはちの里のすみうかりしも
あづまよりあるをこのまかりのぼりてさきくもの
いひ侍りける女のもとにまかりたりけるにいかでいそ

ぎのぼりつるすなどいひ侍りければ

讀人志らす

伏屋ハ信濃國也

愚にも思ひましかバ東路のふせやといひし野邊にねあまし
女のもとにつかひしける文のつまをひきやりて返事を
せざりければ

跡しなきの返事
のやうなれど女
の筆跡もなき文
と踏しかけたる
也

跡もあき葛城山をふみゝれば我わたしこしかたはしかもし
人のさうしかゝせ侍りけるおくにかきつけ侍りける
かきつくる心みえある跡あれども忍ばん人やあるとて
大納言朝光下らうに侍りける時女のもとにまのひてま
かりてわかつきにかへらじといひければ

春宮女藏人左近

岩橋のよるの契もたえぬべし明るわびしきかつらぎののみ
入道攝政まかりかよひける時女のもとにつかひしける

ふみを見侍りて

春宮大夫道綱母

疑ひし外に渡せる文みればわれやどだえにあらんとすらん
題まらず 讀人まらず

いかでか尋ね來つらん蓬生の人もかよぬ我やどのみち
東三條にまかりいで、雨のふりける日

承香殿女御

雨あらでもる人もなきわが宿を淺茅が原とみるぞかかしき
まかりかよふ所の雨のふりければ

大納言朝光

いにしへのたが故郷ぞればつかな宿もる雨に問てまらばや
中納言平惟仲久しうありてせうそこして侍りける返事
にかゝせ侍りける

高階成忠女

夢どのみ思ひかりにし世中をかに今さらになどるかすらん

漏るに守るをそへたり

題まらず

源公忠朝臣

人もみぬ所にむかし君とわがせぬわさくをせし予戀しき
左大將濟時があひしりて侍りける女つくしにまかり下
りけるに實方朝臣宇佐の使にてくだり侍りけるにつけ
てどぶらひにつかひしたりければ

藤原後生が女

今日迄のいきの松原生たれど我身のうさにあげきてぞふる
成房朝臣法師にあらむとていひむるにまかりて京の家
にまくらばこをとりにつかひしたりければかきつけて
侍りける

則忠朝臣女

いきたるか死ぬるかいかに思ほえず身より外ある玉匣たまぐしかき

生の松原ハ筑前國也と宇佐に宇佐なかけたりと見飯室ハ横河の麓也

拾遺和歌集卷第十九

雜戀

題玄らす

柿本人丸

袖振山の大和國
也上句久しき
結句万葉集に思
ひきわれはさあ

少女子が袖ふる山のみづがきの久しき世より思ひそめてき
いかりにまうであひて侍りける女のものいひかけ侍り
けれどいらへもし侍らざりければ

平定文

稻荷山社のかずをひととはいつれなき人をみつとこたへむ
題玄らす

柿本人丸

み嶋江の玉えの葦を玄めしよりかのがとぞ思ふいまだ未からねと
大中臣能宣

いづくさしも云々
こゝあたなる男の
ありきして数多
の人にあひ語ふ
をあさけりてよ
めるなるへし

あだなりとあだにいかいさだむらん人の心を人の知やの
讀人玄らす

双六の市場に立てる人妻の逢いでやみかん物にやのあらぬ
濡衣をいかいさざらむ世の人の天の下にしすまむかざりの
あがされ侍りける時

贈太政大臣

天の下のがるゝ人のあければやきてし濡衣ひるよしもなき
題玄らす

讀人玄らす

筑摩神の近江國
也其祭に男を持
てし數に鍋を土に
いへり

いづくとも所定めぬ玄ら雲のかゝらぬ山のあらじとぞ思ふ
白雲のかゝるらととする人を山のふもとによせてける哉
いつしかも筑摩の祭とくせあんのれなき人のあべの數みん
まだ少將に侍りける時采女町のまへをまかりわたりにけ
るにあすかのうねめあがめいだして侍りけるにつかひ
しける

小野宮太政大臣

そこにあつては
足下をわけて
いへる也

柏森の大和國也
さて柏木は左右
兵衛の異名にて
敦忠の常官なれ
はかくよめる也

しかし然に鹿を
かけたる也

人知れぬ人待顔にみゆめるいたがたのめたる今夜あるらん
かへし
明日香采女

池水の底にあらでいねぬおのくる人もあしまつ人もあし
中納言敦忠兵衛佐に侍りける時に忍びていひちぎりて
侍りけることよにきこえ侍りければ

右 近

人ぞれず頼めし事の柏木のもりやまにけん世にふりにけり
やむごとあき所にさぶらひける女のもとに秋ころまの
びてまからんとをどこのいひければ

讀人まらず

秋萩の花もうゑおかぬ宿あればまかたちよらむ所だにあし
題まらず
小余綾のいそぎてきつるかひもあく又こそたてれ沖津白浪

人のめし侍りけるをどこの獄に侍りてめのどのもとに
つかひしける

忍びつゝよるこそきしか唐衣ひとや見んとし思ひざりしを
さだもりがすみ侍りける女にくにもちがまのびてかよ
ひ侍りけるほどにさだもりまうできければまどひてぬ
りごめにかくしてうしろのどよりにがし侍りけるつと
めていひつかひしける
くにもち

宮造るひだの工匠の手斧の音ほどくしかるめをもみし哉
をどこもちたる女をせちにけさうし侍りてあるをどこ
のつかひしける

ありとていへる世かひふる唐國の虎ふす野邊に身をも投てん
まがの山ぞえにて女の山の井に手あらひむすひてのむ
をみて
貫 之

ありとていへる世
に存へありとて
もの意也

ほどくしかる
は恐しがる意也

とがへるハ羽を
啓る事也

過の云々ハ我に
頼にも出逢ぬハ
身に過つ事あり
てにやもしさし
なきにっそを我
らぬ身ハ只我
をいさふにや
思はるさの意地
ハ池の槭なれけ
たる也

ひすぶ手の雪ににこる山の井のあかでも人にわかぬる哉
三條の尙侍方たがへにわたりてかへるあしたにまづく
ににこるばかりの歌いまいえよまじと侍りければ車に
のらんとしけるやどに

題 志らす

讀人 志らす

はしたかのどかへる山の椎柴のはかへんすども君のかへせじ
久しうまうでこざりけるをとこのたまさかにきたりけ
れバ女のどみにもいでざりけれバ

題 志らす

過のあやまちあるかあさかを知らぬ身の厭ふに似たる心地こそすれ
行水のあわさらバこそさえかへり人の淵瀬を流れてもみめ
どもかくもいひはなたれよ池水の深さ淺さをたれか知べき

筑紫いせ物つ浦うらに昔男
好むさいふさいき色
物さすたれの内
なる人のいひけ
るなきいてさあ
り築川の筑前に
あり

在原業平朝臣

そめ川を渡らん人のいかでかの色になるてふ事のあからん
賀茂臨時祭の使にたちてのあしたにかざしの花にさし
て左大臣の北方のもとにいひつかはしける

兵衛

題 志らす

讀人 志らす

千早振かも河邊の藤なみかけわする、時のあさかあ
世中のいかいいせましまげ山の青葉の杉のまるしだにあし
埋木のあか出バむといふめれバくめちのはしの心してゆけ
世中のいざどもいさや風の音の秋に秋そふこちこそすれ
いはみに侍りける女のまうできたりけるに

人 磨

石見なるたかまの山の木の間より我ふる袖を妹みけんかも

久米路橋ハ信濃
國にあり申出は
むは上の頼もし
けにて底の心し
さなきをあやふ
めるにや

いづみの國に侍りける程に忠房朝臣やまどよりたくれ
るかへし 貫 之

高師濱の和泉國
大嶋郡にあり

沖津浪たかしの濱の濱松の名にこそきみをまぢわたりつれ
かみいたくなり侍りけるあしたにせんよう殿の女御の
もとにつかひしける 天曆御製

君をのみ思ひやりつゝ神よりもこの空にありしよひ哉
こしある人の許につかひしける 貫 之

白山は加賀國に
あり

思ひやる越のまら山まらねども一夜も夢にこえぬ日ぞあき
題まらず 人 磨

山科のこのたの里に馬のあれどからよりぞくる君を思へば
春日山雲井かくれてどほけれど家のおもはず君をこそ思へ
物へまかりけるみちに濱づらにかひの侍りけるをみて

坂上郎女

我背子をこふるもくるしいとまわらば拾ひて行かん戀忘貝

人のくにへまかりけるに海士のしほたれ侍りけるをみ

て 惠慶法師

故郷をこふる袂もかわかぬに又しほたるゝあまもありけり

仁和の御屏風にあままをたるゝ所につるさく

大中臣頼基

搦たるゝ身の我のみと思へども外あるたづもねをぞ鳴さる

まうでくる事かたく侍りける男のたのめわたりければ

讀人まらず

徒然と思へばうさに生る芦のはかあきよをばいかし頼まん

うさしま 順

さだめあき人の心にくらぶればたゞ浮嶋のあのみありけり

中々ひとりわらばあき女はいひ侍りければ

なかく一人あ
らにいまましひ
に君にそひたる

もかひなし 獨住
してあははよ
らんごの意也 數
ならぬ身の物
の敷にも頼み給
ふへからすこの
意也
あやかり易き
葛葉の風にうら
かへる物なれは
也
うもれたりけり
山邊の徒然に
心晴たき意を
いへる也

誰かすまはか
云々彼の男の
住ぬ心影も見
えぬ心に鹿毛の
駒をへたる也

おしひも出ぬに
日も出ぬをそへ
たる也
人の爲にいへる我
御事をいへる也
此歌前に見ゆた
り一本になきを
よしとすへし

てうさハ調度
て道具也ちんハ
沈也

涙川云々我泪
の流れるに枕
の流れるに枕
にこそこの意也
の亦もハ御勸當
の亦也

元 輔

獨のみ年へけるにも劣らじを數奇らぬ身のあるあるか
題えらす 讀人えらす

風はやの嶺のく老葉のともすればあやかりやすき人の心か
紀郎女にれくり侍りける 中納言家持

久方の雨のふる目を只ひとり山邊にをればうもれたりけり
をどこのまかりたえたりける女のもとに雨ふる日見馴
れて侍りける從者の鹿毛の馬もとめにとてあんまうで
きつるといひ侍りければ 讀人えらす

雨降りて庭にたまれる濁水たがすまはかはかげのみゆべき
よと共に雨ふる宿の庭たづみすまぬに影の見ゆるものか
日他の時太皇太后宮より一品のみこの許につかりしけ
る

人 磨

逢事のかくてや遂にやみの夜のおもひも出ぬ人のために
題えらす 女のもとに菊ををりてつかひしける 讀人えらす

けふかとも明日とも知らぬ白菊のえらす幾世をふべき我身ぞ
忠君宰相まさのぶがむすめにまかりかよひてはどきく
てうどきもをはこびかへしければぢんの枕を添て侍り
けるを返しおこせたりければ

涙川みづまさればやえきたへの枕のうきてとまらざるらん
延喜御時按察のみやす所久しくかむじにて御めのとに
つけてまぬらせける

世中をつねなき物と聞しかどつらきことこそ久しかりけれ

久しき事の中
の御意なるさ
人の御意なるさ

いはみかたさ
此集五につら
はす石見瀬に
深き心一つに
いへるを書遣り
しなるへし

女の侍従也

それならぬ云々
わらんに忘れ給ふ
へさいひし給ふ
よく覚え給ふ
よの意也

御かへし

つらきをバつねなき物と思ひつゝ久しき事を頼みやんせぬ
題まらず 伊 勢

我こそ憎くもあらめ我宿の花みにだにもきみがきまさぬ
つゝむこと侍りける女の逢事をせずのみ侍りければ一
條攝政いはみがたといひつかのしたりければ

讀人まらず

石見瀧何かのつらきつらからならみかてらに來ても見よかし
一條攝政下らうに侍りける時承香殿女御に侍りける女
忍びて物いひ侍けるに更にあとひそといひはて侍りけ
れば契し事有しかばあといひつかしたりければ

本院侍従

それからぬ事も有しをわすれぬといひし斗を耳にとめけん

上句はたしさい
はん爲の序也

我さいへばい
わればさいへん
か如し
ほくらば寶舟也
或は神殿をいふ
さしへり

題まらず

みかりする駒のつまづく青つゝら君こそ我のはだし也けれ
延喜御時中宮屏風に 眞 之

いづれをかまると思ふん三輪の山有としあるの杉にぞ有ける
いかりにまうでけさうしはじめて侍りける女のこと
人にあひて侍りければ 藤原長能

我といへば稻荷の神もつらき哉人の爲どのいのらざりしを
稻荷のほくらに女の手にてかきつけて侍りける

讀人まらず

瀧の水かへりてすまば稻荷山あぬか昇れるとるしと思ふん
元良のみこ久しくまからざりける女の許に紅葉れこそ
て侍りければ

思出て問にのあらずあきはつる色の限りをみするありけり

やいしさてハ扇
は夏ハ用は捨て
秋風ふねは捨ら
る物なれば捨ら
女の中にはむ送る
りこをいむ物なる

上旬長くさいは
ん爲の序也

女のもとに扇をつかひしたりけれはいひつかひしける
ゆゝしどていむ共今ハかひもあらじ愛をハ風につけてやみなん
題去らず 貫 之

獨して世をしつくさば高砂のまつ常磐もかひあかりけり
三條右大臣の屏風に

玉もかるわまのゆきかたさす棹の長くや人を恨みわたらん
年の終に人まち侍りける人のよみ侍りける

たのめつゝ別れし人を待程にどしさへせめて怨めしきかき

拾遺和歌集卷第二十

哀 傷

むすめにまかりたれて又のどしの春さくらの花ざか
りに家の花を見ていさゝかに思ひをのぶといふ題をよ
み侍りける 小野宮太政大臣

さくら花のどけかりけりあき人をこふる涙ぞまづの落ける
平 兼 盛

面影に色のみのこるさくら花いく世の春をこひんとすらん
清 原 元 輔

花の色もやども昔のそれあがらかはれる物の露にぞ有ける
大 中 臣 能 宣

櫻花にはふ物からつゆけきこのめもものを思ふかるべし
この事をき侍りて後に 大 納 言 延 光

のどけかりけり
は落花のけしき
もなほの意也
かさてはせたる
也

君まさばまづぞをらまし櫻花風のたよりにきくぞかきしき
中納言敦忠まかりかくれしのち比叡のにしさかもとに
侍りける山里に人々まかりて花見侍りけるに

一條 攝政

人さけ敦忠卿を
いへるなるへし

いにしへのちるをや人の惜みけん花こそいま昔こふらし
天曆御門かくれ給ひて又のとし五月五日に宮内卿かね
みちがもとにつかひしける

女藏人 兵庫

あやめもまら
心の稚きほらの
る也

さ月きてあがめまされば菖蒲草思ひ絶にしねこそあかるれ
ふくたりといひ侍りける子のやり水にさうぶをうゑお
きてなくあり侍りにける後の年れひいで侍りけるを
見て

栗田右大臣

あやめもまら
心の稚きほらの
る也

忍べどやあやめもまらぬ心にも長からぬ世のうきに植けん
右兵衛佐のぶかたまかりかくれにけるにわやのもとに

子戀の杜の伊豆
の國にあり

つかひしける

右大臣

こゝにだにつれくとあく郭公ましてこゝひの杜のいかにぞ

朝顔の花を人の許につかひすとて

藤原道信朝臣

此歌女五宮の母
君失せ給へる時
の御製とさきこ

朝顔を何はかきしとねもひけん人をも花のさこそみるらめ
夏は、そのもみぢのちりのこりたりけるにつけて女五
のみこのもとに

天曆御製

時あらねは、その紅葉散にけりいかにこのもと寂しかる覽
妻のあくありて侍りける比秋風の夜さむに吹侍りけれ

大貳 國章

おもひきや秋の夜風の寒けきに妹あき床にひとりねんどい
中宮かくれ給ひての年の秋御前の前裁に露のおきたる
を風の吹きびかしけるを御覽じて

天 曆 御 製

秋風にちびく草葉の露よりもきえにし人をさにとへん
妻にまかりおくれて又のどしの秋月をみ侍りて

人 曆

こ予みてし秋の月夜の照せどもあひみし妹のいや遠ざかる
朱雀院の御四十九日の法事にかの院の池の面に霧のた
ちわたりに侍りけるをみて 権中納言敦忠

君なくてたつ朝霧の藤さるも池さへさるぞかあしかりける
猿澤の池にうねめの身あげたるを見て 人 曆

わきもこがねくたれがみを猿澤の池の玉藻とみるぞ悲しき
題 乞 らす 讀 人 乞 らす

心にもあらぬうき世にすみ染の衣のそでのぬれぬ日ぞあき

采女の身なけたるの奈良帝につ
らうまつりし采女寵にさるへし
後帝を戀奉りて此池に身をなけし
事大和物語に詳なり
ねきたれ髪はれおきたるを朝髪といふ也

服ぬき侍るとて

はらへは除服の被さて果の日
河原に出て被するなり

藤衣はらへてすつるあみだ川きしにもまさる水ぞながるゝ
藤衣はつるゝいとひ君こふるあみだの玉の緒とやなるらん
恒徳公の服ぬき侍るとて 藤原道信朝臣

限われバけふぬぎすてつ藤衣はてあき物のなみだなりけり
どしのぶがあがされける時あがさるゝ人の重服をきて
まかるときゝて母がもとよりきぬにむすびつけて侍り
ける

人あしゝむねのちぶさをほむらにてやくすみ染の衣きよ君
ねもふ妻にれくれてあげく比よみ侍りける

大 江 爲 基

藤衣あひみるべしとねもひせばまつにかゝりて慰めてまし
年ふれといかある人かどこふりて相思ふ人に別れざるらん

人なし云々の母の乳に生長せしあひかく飛人
むらにてさよめむらにさよめむらに
かけたりる也黒染を炭に

人の子ハ舉賢
義孝の二人とし
同日にふくむの
しを云此母にの
慕子女主尼にふ
りぬ給へるにや
深下左近少將五
位下左近少將五
右近少將五位上
亮廿

色分れぬハ親に
れくれぬハ親に
色なれぬハ親に
色なれぬハ親に

題まらず

讀人まらず

すみずめのころもの袖ハ雲あれや涙の雨のたえずふるらん

謙徳公の北方二人の子どもあくありて後

わまといへどいかある盃の身あればか世に似ぬ潮をたれ渡る覽

昔見侍し人々多くあくありたる事を歎くを見侍りて

藤原爲頼

世の中にあらましかバと思ふ人あきが多くもありにける哉

かへし

右衛門督公任

常あらぬ世ハ愛身こそ悲しけれ其數にだに入らじと思へバ

れやにれくれて侍りけるころをどこのとひ侍らざりけ

れバ

伊勢

あき人もあつらさを思ふにも色わかれぬハ涙なりけり

題まらず

讀人まらず

うつくしと思ひし妹を夢にみて起てさぐるにあきを悲しき

順が子あくありて侍りける頃とひにつかいしける

清原元輔

思ひやるこゝひの杜の雫にひよそある人のそでもぬれけり

子にれくれてよみ侍りける

平兼盛

あよ竹の我子のよをばまらずしておほしたてつと思ひける哉

大納言朝光がひすめの女御まかりかくれにける事をき

侍りてつくしよりとひにおこせて侍りけるころ子馬

助ちかまげがあくありて侍りけれバ

藤原共政朝臣妻

我のみやこのよいうきと思へども君も歎くときく予悲しき

かへし

憂世にある身もうしと歎きつゝ涙のみこそふるこゝちすれ

子戀の杜前に出
たり

こねてきつらむ
一本に越てや
きつるさあり
さひに用ひに
の意也

思ふよりいふは
愚言不盡
レ理の意也

こたに箱に子
をけりたる也

うみたてまつりたりけるみこのさくありて又の年郭公
をきゝて

伊 勢

去での山こえてきつらむ時鳥こひしき人のうへかたらさむ
伊勢がもとにこの事をとひにつかはすとて

平 定 文

思ふよりいふの愚にありぬれば譬へていん言の葉ぞさき
中納言兼輔めさくありて侍りけるとしの去はすにつら
ゆきまかりて物いひ侍りけるついでに

貫 之

こふるまに年の暮さばさき人の別れやいと遠くありさん
めなくありて後に子もさくありにける人をとひにつか
はしたりけれバ

讀 人 志 らす

いかにせん忍にの草も摘ぬかたみと見えしこたにさけれバ

下句夢より外に
は逢見かたき故
に此上の暫し歎
きを忘れてさの
意也

吉備津のころと
万葉集にあり采
女志賀に在しな
るへし

子ふたり侍りける人のひとり春まかりかくれいまひ
とりの秋さくありけるを人のとふらひて侍りけれバ
春の花秋のもみぢと散り果て立かへるべきこのもともさし
娘にれくれ侍りて

中 務

忘れられて暫しまどろむ程もがさいつかの君を夢さちでみん
むこにれくれ侍りて

うきながら消せぬもの身さけり羨しき水のあわかさ
題 志 らす

讀 人 志 らす

世中をかくいひくゝて果々のいかにやいかにあらむとす覽
吉備津のうねめさくありて後よみ侍りける

人 麿

さゝ涙や去がのてこらがまかりにし川瀬の道をみれば悲しも
さぬきのさみねの嶋にしていはやのなかにてさくあり

結句万葉集にな
せむ君かもしあ
り

買之か歌二首古
今集に載せたり

家にいきて云々
万葉集に家に来
て我屋を見れば
玉床の外にむき
けりいも木枕
さある方まさり
ぬへし
みなわの水の泡
也
いし山の岩根に
おけるハ万葉集
に鴨山の磐根し
まけるさありい
やも山鴨山同所に

たる人をみて

沖津浪よる荒磯を去きたへのまくらとまぎておれる君かも

紀友則身まがりけるによめる 貫 之

あすまらぬ我身と思へと暮ぬまのけふハ人社悲しかりけれ

あひしれる人のうせたる所にてよめる

夢とこそいふべかりけれ世中ハうつゝある物と思ひける哉

めのまに侍りて後かおしびてよめる

人 磨

家にいきて我家をみれば玉篋の外にたきたる妹がこまくら

まさもくの山べひいきて行水のみあわの如くよをバ我みる

石見に侍りてあくあり侍りぬべき時にのぞみて

いも山の岩根における我をかもまらすて妹が待つゝ有らん

世中心ばそくればえてつねあらぬ心地し侍りければ公

忠朝臣のもとによみてつかりしける此間やまひれもく
ありにけり 紀 貫 之

手にむすぶ水に宿れる月影のあるかあきかの世に社有けれ

この歌によみ侍りて程あくあくありにけるとあむ

家の集にかきて侍る

朱雀院うせさせ給ひけるほどちかくありて太皇太后宮

の幼あくれのしましけるを見たてまつらせ給て

御 製

吳竹の我よのこと成ぬともねハ絶えせずもあかるべき哉

題まらず 讀人まらず

どりべ山谷に煙のもえたハはかあくみえし我とまらあん

やまひして人ねほくあくありし年あき人を野らやぶあ

どにれきて侍るをみて すけきよ

我よはここにハ
同し世にたはし
まさす成てもの
意也
のらやふハ野等
あるハ蔵の意也

皆人の命をつゆにたどふるの草むらごどにれけばありけり
世のはかなき事をいひてよみ侍りける

玄 た が ふ

つゆのすみか
一本につひの住
さあり

草枕人のたれどかいひかきしつゆのすみかの野山とぞみる

沙 彌 満 誓

下何万葉集に
きいにし舟の跡
なきかこさあ
り

よのちかを何になとへん朝ほらけこぎゆく舟の跡の玄ら涙
忠蓮南山の房の繪に死人を法師の見侍てあきたるかた
をかきたるをみて

源 相 方 朝 臣

契われバかばねあれ共逢ぬるを我をバ誰かどのんとすらん

讀 人 玄 ら ず

山寺の入相の鐘の聲ごどに今日もくれぬときくすかあしき

法師にあらむとて出ける時に家にかきつけて侍りける

慶 滋 保 胤

愛世をバ背かバけふも背きなんあすもありとの頼むべき身か

題 玄 ら ず

讀 人 玄 ら ず

牛の車火の宅ハ
法華經譬喩品に
爲求牛車出於火
宅とあるによれ
る也

世中にうしの車のあかりせばおもひの家をいかでいでまし
法師にあらむとしける頃雪のふりければたうがみに
かきをさめて侍りける

藤 原 高 光

世中にふるどはかあき白雪のかつ消ぬるものとまろく

服に侍りけるころあひしりて侍りける女のおまにあり

ぬときよつつかいしける

よ し の ふ

墨染の色にわれのみと思ひしを愛世をそむく人もありとか

かへし

讀 人 玄 ら ず

墨染の衣とみればよそあがらもろともにさる色にぞ有ける

成信重家ら出家し侍りける比左大弁行成がもとにいひ

つかいしける

右 衛 門 督 公 任

結句一本にあり
けりとありよな
そむける人も墨
染の衣なれば也

思ひしる人ありける世中をいつをいつとて過すあるらん
少納言藤原統理にとしごろちぎること侍りけるを志賀
にて出家し侍るときよといひつかいしける

さゝ涙や志賀の浦風いかばかり心のうちのすゝしかるらん
女院御入講捧物にかねしてかめのかたをつくりてよみ
侍りける
齋 院

こころつくす業
は佛事と思ひ給
ふ故に八講に給
逢給はれはかく
よめる也
やうて其まうけ
して云々其御
賀の用物を布施
るにせさせ給ふ
るへ

ごうつくす御手洗川の龜あれば法の浮木にあのぬかりけり
天曆御時故きさいの宮の御賀せさせ給へんとて侍りけ
るを宮うせ給ひにけれいやがてそのまうけして御諷誦
かこちのせ給ひける時 御 製
いつしかと君にと思ひし若菜をば法の道にぞけふ摘つる
爲雅朝臣普門寺にて經供養し侍りて又の日これかれも
るどもにかへり侍りにけるついでに小野にまかりて侍

上句の道のふの
下句の王賞の仙
翁の基を見つる
の柄のたる花の也
さて今日の花の柄
面白きに斧の柄
朽るまで有た
しこの意也

くらきより法の
華經化城喻品に
從冥入於冥永不
聞佛名さあるに
よれり

りけるに花のおもしろかりければ
春宮大夫道綱母
薪こる事昨日につきにしをいざをのゝえのこゝに朽さん
左大將濟時白川にて説經せさせ侍りけるに
實 方 朝 臣
今日より露の命も惜からずはちすのうへの玉とちぎれば
かこちひし侍りける人のくるしくおぼえ侍りければえ
れき侍らざりける夜の夢にをかしげあるはうしのつき
れどろかしてよみ侍りける
朝毎にとらふちりだにある物を今幾世とてたゆむあるらん
性空上人のもとによみてつかいしける
雅 致 女 式 部
くらきより暗き道にぞ入ぬべきはるかにてらせ山の端の月

市門ハ市場の門也

經に具三十二相
の事也 佛の姿
提婆品に佛の
私に仕へての
葉汲水したる事
もてよめる也
心地観經に幼稚
之前所飲母乳
八十石あり
婆羅門正南天
竺より來りし始
に菩提を證し
法花會場也 眞如
空は如名不眞如
融三諦の空也
融三諦の空也

極樂をねがひてよみ侍りける

仙慶法師

極樂のはるけき程ときししかど勉めていたるところ也けり

市門にかきつけて侍りける 空也上人

一たびも南無阿彌佉佛といふ人の蓮の上へのぼらぬあし

光明皇后山階寺にある佛跡にかきつけたまひける

三十ちあまりふたつの姿をさへたる昔の人の踏る跡ぞこれ

大僧正行基よみたまひける

法華經をわがえし事の薪こり菜つみ水くみつかへてぞえし

百草にやそくさをへて給ひてし乳房のむくひけふぞ我する

南天竺より東大寺供養にあひに菩提がさぎさにきつき

たりける時よめる

靈山の釋迦のみまへに契りてし眞如くちせずあひみつる哉

かへし

波羅門僧正

かひらふの羅摩
生れし伽毘羅國
國をいふ也

になれ云々さ有
はなれさかくいふ
歌なりさあはらば
したる也さて前
の如く和したる
いへる此集を
証すべし公任卿
花山院の公任卿
の所爲なるへし
さいへり

かびらゑに共に契しかひありて文珠のみ顔あひ見つるか
聖徳太子高岡の山邊道人の家にねしけるに餓たる人
道のほどりにふせり太子ののりたまへる馬とまはりて
ゆかずむちをわけてうちたまへどまはりへまはりまはりて
いまる太子すぢち馬よりおりてうゑたる人のもとに
わゆみすゝみ給ひて紫のうへの御子をぬぎてうゑ人の
うへにねやひたまふ歌をよみてのたまひく
まきてるや片岡山にいひにうゑてふせる旅人わはれ親あし
にあらなれりけめやさす竹のさねのやあさいひに飢
てこやせるたび人あわれいふ歌あり
うゑ人のかしらをもたけて御かへしを奉る
いかるがやとみのを川の絶バこそ我大君のみ名をわすれめ

其
語

拾遺和歌集終

1150

佐々木弘綱
佐々木信綱
標註

公任家集

東京 博文館藏版

拾遺雜春に北白
川の山庄に花の
面白く咲いて人々
けるを見たりけり
まうてきたり云
れは春きてそは
ありさしたるに
人々いきたりけり
るにのいきのい
は衛にきてたり
けるに白へし
女御の白願思
公の女御の妹花
公任の女御なり
院の女御なり

前大納言公任卿集

佐々木弘綱
信綱 標註

春白河に殿上の人々いきたりけるに

春きてぞ人もとひける山里の花こそやどのあるじありけれ

同じ所に紅梅うゑ給へるにはじめて花さきたるにおは

したりけるに女御の御もとより

植しよりまたまつ物を山里の花見にさそふひとのあきかき

かへし

うゑあかし花さかりせば蓬生を何につけてかおもひ出まし

雨のうちに山里の梅をおもふといふ事を

山里の梅をねもふに雨ふればたゞにもちらで色やまさらん

れりきは寝念におもふなり

かゝる事のよし
いりこしたまふ
なごあるこし
かなる意さし
かたし誤字ある
へし

二月まで梅の咲ざりける年前の梅にむすびつけたる
まゐらめや霞の空を赤がめつゝ花もにはいぬ春を赤げくと
たがどもえ知給はでとる人やあると結び付給うける
覺東かいづこあるらん花さかぬ霞のうちのうぐひすのこゑ
いと久しうとる人も赤きに打たゆみてとられにけりあ
さましうねたきことをおぼしけるに深き曉にむすび
つけゝるを見てとらへといめてみ給ひし
霞たつ遠山ふかさうぐひすの花のはやしをどふにぞ有ける
つかひにとへば三條の宮に□にといふ人のとらせし赤
り本のまゝり給はざりし事なりかゝる事ゆかしがりこし
給ふ赤といふ返しに
うぐひすの音をまゐるべにて霞たつみ山のうちを尋ねつる哉

三輪の山は大和
の城の山は山城
なれどもさあ
ひきませせあ
古昔によりてか
くよめるなり

その山もさあ三
輪の山本をいへ
るなり

深しなのなひ
息のてになひ也
此なを万葉集に
ていもさいへり

はせへて奉りたる

花咲し日より待かき尋ぬやと三輪の山邊のうぐひすのこゑ
かへし

花をのみ尋ぬるはせにうぐひすの其山もどを過やしにけむ
花山院まだ春宮と申しけるとき水には赤の色うかぶと
いふことを人々によませ給ふに

花の色をうかぶる水の淺ければ干とせの秋のちぎり深しな
やみのあやかしといふ題を

春の夜のやみにしあれば匂ひくる梅より外の花赤かりけり
前ちかき桃のはじめて花咲たるに

うれしくももゝの初花みつるか赤又こむ春も定めなきよに
白川の西のとに人のかきたりける

きても見でな
りても見ずしてな
きてもみで花をさ赤がら散しつる風のためにや人の植けむ

くれなゐに來れ
なかれたり

梅にやあらぬ
梅なるしな
さいふこそな
申務宮の村上天
皇の皇子具平親
正也宮のたまは
玉ふのたまは
けるの誤にては
なき

都いで、花見にこそくれあむの色なる梅にこそ染つれ
返しかたはらにつくる

風にしも何かまかせむ梅の花よそへてどはむ人をこそまて
花ひらの敷にてもしれ紅にやしほそめたる梅にやあらぬ
中務の宮よて人々酒のみしつとめて宮のさこ給うけ
る

あかざりし君がにはひの戀しさに梅の花をうけさひ折つる
かへし

今予玄る袖にはほへる花の香の君がをりける匂ひかりけり
中宮にておにのをりにや

めづらしき玉のうておの花のかけにきかまくほしき鶯の聲
かへし誰どもしらす

まづえにて聲ををしみし鶯の花のさかりを待にぞありける

粟田に人々ねはしておもふ心よむに

うき世をバ峰の霞やへだつらん猶山さどのすみよかりけり

二月十日前かりける梅の咲たりけるにさどある女房に

君により風もよきつゝ散がてにまつめる花のをりき過しそ

なしの花に時過たる實のつきたるに右大辨

春ふかみみ山がくれの花なしといふにつけても分ぞ兼ねる

かへし

常あらぬみをぞ恨むるあらぬより花あしといふよに社有けれ

またかくていとて

有といふ程だにあるをかつみつゝ花あしといふ春を社思へ

二月に雪のいとたかう降たるゆきよりがさうしの前に

雪の山をいとたかうつくりて煙をたてたるに雪のいた

うふればからかさおをれをひてたりたてければ

まつめる花の君
かまつて吹て風し
よきつゝ吹て待
なり居りさうな花

おきよりかさう
しはゆきよりさ
いふ人の曹司な
るへし

そちのみや
泉院の皇子
親王にて太
に成玉へれ
かまうすな
ま

春はすまは
春はすまは
に折られぬ
いたさんさ
也

あちきなく
のほりあひ
こいふ意ふ
り

東路のふじのたかねにあらねども三笠の山もけぶり立けり
そちのみや花見に白河におはして
われが名の花ぬす人とたてばたて唯一枝のをりてかへらむ
と有けれバ
山里のぬしにえらせて折る人の花をも名をも惜まざりけり
又みやより
知られぬぞかひあかりける飽ざりし花に替てし名をの惜まず
かへし
人えらぬ心のやどをえりをれば花のあたりに春はすまはん
花をも名をもと聞え給へりける御かへしにつけてみち
さだが妻のきこえたりける
折人のそれあるからにおちきさくみし山里の花の香ぞする
かへし

なべての袖は
く思へる人
でひさしほ
思ふ袖に移
せじさなり

しひて霞の
ざしたる關
りやりに尋
せじさなり

たのつから
わく人さの
と宿を分る
やうに成た
いふ意なり

えらめやその山里の花の香のあべての袖に移りやりする
また聞えたりける
えらせじと空に霞のへだてゝいたづねて花の色もみてしを
かへし
今さらにかすみとちたる白河の關をえひての尋ぬべしやは
白河にて
故郷の花をも思ふ山さくらちるをみすてゝかへりがたさよ
白河に忍びておはしたるに大白河といふ所に殿上人お
はくれはしたりとさゝ給ひてその日式部卿の宮の中將
おは白河におはしけるに
えら河のおちと河邊のさくら花いかある宿を人たづぬらん
かへし
花の色の深さあさゝにおのづからやどわく人と成にける哉

三月十日松が崎の念佛さゝに女御うへあそまのびてお
はしけるにみちのはせ月ねぼるにて風の聲さどはるか
かり女御どの、御

晝あらバ河邊の花もみるべきに夜半の嵐のうしろめたさよ
とありけるに

香をとめてゆかバけぬべし山風の吹まゝに散陰みればうし

夜一夜たふとき事さゝあかして曉がたにみればよる散

ける花のやり水の浪によせられて蘇枋貝のさまあるに

櫻貝とは是をやあそいひて

よもすがら散ける花を朝ぼらけ明石の濱のかひかどぞみる

といふにともものり

水にうかふ櫻のかひの色みれば浪の花とぞいふべかりける

といふに

前にかへりかた
まよさあり又こ
いにうしろめた
さよさありか
るてにやは今ハ
俗なるやうにい
ふなるはか
例なしらぬなり
よくく心なこ
いめて見るへき
なり

明石に赤き意を
かれたり

あさほかもなき
かあとのまるし
しなきなり

朝ぼらけ春の湊の浪あれや花のちるときぞよせまさりける

御車のこといもあるべしだらにゑざうしに花のちるを

み給ふむかしの御むろの南ある花のいといたうちるを

とり集めてすけあきら

花のちるむろの昔のあとあがら昔の庭にハあとはかもあし

といふに

さくら花露にぬれつゝ尋ぬればいにしへまるとき宿の庭かな

此ついでにすけあきら遠くいぬべき事なせいひて

すぎがたき花につけてぞ都出てゆかまし物□あつちの風

すけあきら

春過てちる花だにもある物を老の身をたゞれもひやらさん

白河により給ひて

まら河のあがれてけふをわすれめや

なかれてハ流れ
てなからへて
なれたり

みたる水絶て
浅くふるさとしな
風雅集卷下開書
三條殿白こりり
ぬて侍りける比
家の藤の咲はし
めたる見えてよ
み侍りけるさあ
り

故郷の公任卿の
白河のなつ所を
いへるなり

とありければ御車より
みたえて浅き瀬とあるとも
三條殿世中すさまじうてこもりればしけるころ御前の
ふちの咲はしめたるを
年ごとに春をもえらぬ宿かれど花さきそむる藤もありけり
花山院観音院にたのして残の花をたづぬ山寺にあそぶ
といふ題よませ給うけるに
みるまゝにかつちる花を尋ぬれば残の春ぞすくさかりける
常にます鶯の峰をしまだみねばけふ山里のめづらしきかき
三井寺に物おらひに入給ふとて白河により給へりければ
花のさかりありけるがかへるさに散はてしければ
故郷の花のまたてぞちりにける春より先にかへると思へど
白河に三月つこもりにかつして

ねながにハ根ぐ
るめに也

ぬるまぬハ風の
あたいに
あへぬなり

をしみにとさしてきつれと相坂の關にも春のとまらざり見
はのすけ京極の家ある紅梅を白河にうゑ給ふとて
堀せ給うければ結ひ付たりける
いにしへの春の形見にちがめつる花をいつれの風さそふ覽
かへし
香ばかりをさそへと思ふ山里の風をねながら誘ふべしやの
人に春のはしめ
すこし春ある心地こそすれ
どの給ひければ
吹そむる風もぬるまぬ山里は
子規まつころを
ほのかにも聞ぬ限のほどきぎす待人さへぞねられざりける
同じ心を女御の御

杜宇云々の歌け
さの寐覺に只一
聲きつる郭公
な十分に飽まで
まじきさなり
いしはからの
の唐に往古より
の家柄の種なる
へしきかけてい
へるなり

夕立を村雨とい
へるいさめつら
うべいたくなに心

待えてもたゞ一こゑを時鳥ぬさめがちにてわかすころかき
郭公聲まれありといふ題を實方中將
里わかぬ空音ときけば時鳥たれにかいかいはいはこたへむ
とあるに

ほとゝぎすあかでややまむ待きつる今朝の寐覺の只一聲を
からなでしこ

色毎にはへる宿の撫子はいにしへからの種にぞあるらし
高遠のきみ

種わきて色しもふかきさでしこの花に心もそめてこそみれ
夕立のしたるに人々歌よみけるに

夕立に草のみどりに見ゆるかき秋さへどほく成んどやする
ためもと

夏の日のふりしもとげぬ村雨に草のみどりを深くそむらん

また

くれなるよぬるゝ袂のさる物をいかさる庭かみどり成らむ
山里の卯花をすけかたの辨

としをへて通ひかれにし山さとの門とふまでにさける卯花
かへし

卯花のちらぬ限のやまざとの木の下闇もあらじとぞおもふ
中納言のちごにおはしけるとき薬玉をたてまつり給ふ
とて女御の御

命をぞつぐといふさるいときなき袂にかゝる今日の菖蒲の
御かへし

いときなきあやめのかふる所から誰に懸りてふべき千世ぞの
また

あやめ草かふる澤水清ければひく人あまたあらざらめやの

ちらのかきりハ
散はてぬ間ハ也
このまたやアは
新緑にて木かけ
のくらくなるを
いへり
中納言ハ公任卿
の子定頼卿なる
へし
誰にかかりてハ
女御に給ふ意ナ
リ
にふる澤水清け
ればハ定頼卿の
母君ハ代明親王
の女なればハ
しよみ玉ふなる
べく

圓融院にのこし
又ハのこし誤り

圓融院にたち花のこに入たるに夏むしをすゑて是よめ
と仰せられけれバ

夏虫のはき立花にやどりしてこの中あから千世もへぬべし
さつきのくもりたりけるに

月待と天のかいらをさがひれば出る程だにみえぬそらかあ
時鳥を待つ月をまつにまされりといふ題を

月よりも待ぞかねぬはとゞきすみ山を出む程をまらぬ
から撫子を人々よむに

敷嶋や大和にのわらぬ撫子の花のうべこそ世に似ざりけれ
くもれる月をまつころ

ふたゝびや人よりまたむ月影の雲の隙よりいでぬかざりの
あでしこをみ給ひて

いそぐべきよとひまゑるく床夏の花に心のとまりぬるかあ

人よりまたむ
人寄待んにひさ
よりのを驚持など
の番に一度ない
へればそを兼ね
たるか

ながたにの長谷
さて解の別荘の
地なり

いみし有けり云
々誤字あるべし

四月にあがたににゑむよ僧正のまうでたりけるに櫻の
盛ありけるをみていみし有けり折て進じて又の日
さのふまでをしみどめてし山櫻よのまの風のいふかしき哉
かへし

春過て君を待ける花あれば又くるまでいちらじとぞれもふ
五月五日

けふ毎に軒のつまなる菖蒲草たあつたつめに劣らざりけり
七月七日藤壺の撫子のはせに人讀半都満字斗たりける

棚機の秋の夜をへて撫子のはなをぞけふのあはせつとみよ
あいせの命婦が家ちかきところに渡り給ひて七月七日

雲井にて契し中いたあバたをうらやむ程にありにけるかあ
かへし

哀にも忘れざりけるくも井かあ棚機つめのけふよりもけに

人讀半都満字
字あるべし

ある人はかな
よむ誤也とい
へり此哥にて其
非をまるとべし

只今の大殿ハ御堂
關白道長公なり

家にこそせめい
かなる意さしわ
きかたし

秋のはじめつかた中務のみやに
 かほ方の秋のきぬれどいかちればまた待花のおそく咲らん
 人々のさが野にゆく日どまりていひやり給うける
 いざちひていくや何なる女郎花分て紐とく野邊のあたりを
 返し中宮大夫たゞ今の大殿
 君をしもよくとも赤きにをみちへし露の心のれかれぬる哉
 女郎花はりていく所の有けるをとはせ給うければあき
 のぶが家にといいひければやりたまうける
 思ふとも心もまらでをみちへしいかある宿に移すあるらん
 かへし
 をみなへし同じゆかりの花なれど君し尋ねば家にこそせめ
 宮に大夫の薬入て奉りたりけるくしの箱を程へて秋立
 日返すどて色々の花どもを入れてかへさせ給ふどて

蓬生の月の光に闇
宿も下なす事いふ
心なき下は事いふ
意也下は事いふ
心わきかたし何
ていへるなるべし

まのぼざりけり
はのぼざりけり
たるなり

初風にのどけき花の露さらばたきてみつべき玉くしげかち
 とかゝせたまうけるをかくもいひてんかしと見たまう
 ける
 夜をこめてれさける露の玉くしげ明ての後ぞ秋とまりぬる
 八月十五夜にあきのぶがもとに
 蓬生のやみものこらぬこよひさへ錦の袖をまらすや有らん
 かへし
 月といへど心のうちにてらさぬに衣の上のそへてこそきけ
 ひさしう住給のざりける所にかへり渡り給うて
 時しもあれ秋ふる里をきてみれば庭の野べども成にける哉
 松のまたもみぢまたるを
 露霜につひにかれせぬ松ちれ下葉の秋にまのぼざりけり
 くるす野にてみづといふ題を

としふとも契れる水のかはらじを人の心やいかいぞ思ふ
 故殿うせさせ給うて後はちたる鈴虫のきこえて侍り
 けれハ

いかでかは音の絶ざらむ鈴虫の憂世にふるゆくるしき物を
 南の岡の鈴虫といふ事を人によませ給うけるに

萬代の秋をこめたる宿さればたづねてすめる鈴むしのこゑ
 鈴虫のとしをへてあくに

年へぬる秋にもあかず鈴虫のふりゆくまゝに聲のまされば
 女御にや有けむ

尋ねくる人もあらあん年をへて我ふるさとのすむしの聲
 女御のかた男女とかたわきて歌合せさせ給ふにまけて
 うれへたりけるどものり

露ふかき色にまされる花のえをいかに定めし野分ありけん

女御にや有けん
 此詞書後拾遺秋
 上にあへし四條
 中宮さあり抄に
 聚義公の女母代
 明親王の女と見

かへし

露を重み折ふしにける花の枝のかごとを風にれはせざらん

嗟峨野を過給ふとて

秋だにもすだゆきはてぬ道されををしみし人ぞ先過にける

中宮の御前にせさい裁させ給ふ日秋の花をうといふ
 題を

松むしの音を尋ねてやほりつらん長閑くみゆる秋の花かき
 北白河に人々まうであはむと聞えたりける日雨ふりて
 とまりにけれハ在國がきこえたりける
 雨をなみふりはへ思ふ山里につらくも雲のへだてけるかき
 かへし

白河の河邊にたてるをみあへしけふの雨にや身をしほる覽
 大殿のみもとにて秋の口あそびくらして

風におほせざらん
 なんの野分の風
 足をつけて不
 るをいばわつて
 るしさいふ意也

さまりにけれハ
 やめにたりたり
 ければなり

秋の夜の水こそことに増るらし月と露とのもるにまかせて

花山院より名もまらぬ花を給はせて

あきごとひに咲といみれど此花の名をまる人の更にあきかき

御かへし

君が代に咲といきけどみもまらず是や言葉の花といふらむ

月の雲がくれけるを

すむとてもいくよもすまじ世中にくもり勝ある秋の夜の月

題おぼえず

秋の野の花の露ともまらざりつ千草のいろにおけるまら玉

鈴虫のはねに

年毎にとこめづらある鈴虫のふりてもふりぬ聲ぞきこゆる

八月十五夜月をみ給ひけるに女房のめさましたりける

に

後拾遺集秋上に
八月はかり月雲
かくれけるをよ
めくすむるをよ
いくよもあらし
よの中に云々
あり

空晴て一本に雲
はいてあり此
方まさりてきこ

君ならで誰か見しらむ月影のかたぶくさ夜の深きあはれを

とてひとりごつに

ふかくしるごといあけれせ月かげをおあし心に哀とぞみる

ふみあどつくり給うけるよの

空晴ておそくも月のすぐるかないといあがむる數や増らん

八月十五夜

ひとゝせの秋の半のこれゝど月の今夜ぞかぎりありける

大殿より

我宿のみぎはにまちし秋風のあかばによくも過にけるかき

御かへし

よど共にすめる汀の秋風につぐるまるしも見えすも有かき

大殿のまた所々にあせし時人々具して紅葉みにあり

き給ひしに嵯峨の瀧殿にて

拾遺集上に大覺
寺に人々あまた
まかりたりける
に古き瀧をよみ
侍りけるたきの
糸は絶て云々
あり大覺寺ハ嵯

暇天皇の御在所
に大古の池の北
にありそこの北
り大澤の池の北
りたてたるべし
るたるるべし

瀧の音のたえて久しく成ぬれと名こそ流れて猶きこえけれ
殿たかへり給ひて

山邊より野邊も残さず尋ねきてとまりもまゐるき宿の紅葉は

白河に紅葉見に大殿のをのこともいきたるにみつとい

ふ人のもとにやりける

ぬしまらで誰かをりけむ山里のものとも物とおもふ紅葉を

かへし

いづこともさだめで過し道おれど秋のとまりに我のきに見

菊の花こそまやかにて秋を去りぬといふ題を

我袖によそへてみれば菊の花ふかきにしより露のまげさの

在國がすまぬ家にて九月九日

住人もあきやま里にさくの花秋のみさきてたゞにすぎぬる

かへし在國

にしり誤字あり
へし

物うきハ俗言に
ふいやるにとい
ふ意あり

出まの紅葉ハは
山の紅葉ハはに
てまハ行敷又ハ
山のもち葉な
るへし

かんしなるにハ
庚申なるに也

住人のにはひこふらん菊の花また移るはぬ事をこそおもへ

又水のやどりの菊

秋ふかき汀の菊のうつろへは涙のばあさへいろまさりけり

圓融院の石山にたはしますに殿上人うきはしといふと

ころにいきてかへるとて

われだにも歸る道に物うきにかで過ぬる秋にかある覽

爲頼

田上や山まの紅葉ハ數しあれば秋ハあふ共のどけきをみよ

秋はつる日山路ゆく

打むれてちる紅葉ハを尋ねれば山路よりこそ秋ハゆきけれ

九月つくる日かんしあるに

めにみえで行秋おれやよもすがらいもねで何を守るなる覽

九月卅日初雪ふるに

この物のうき
物のわかしき
にきこひ

結句のけきの秋
霧の下に心
を入れて心得べし

梅が枝にふる初雪をけさみれば春秋と咲く花にぞありける
女御おほんかへし

花かとも雪ともいさや何事もものうき秋のまられざりけり

九月晦日の日秋のかけの雨の中につきぬといふを

何方に秋のゆくらむ我宿にこよひばかりのあまやとりせで

九月ふたつ有る年の十月朔日の日兼澄がむすめの許に

霧のいみじうたちふたがりけるに

つねよりも程へてすぐる秋あれど猶立どまれ今朝の朝ざり

かへし

置かばる霜にまぎれてたつ霧の久しき秋のためしありけり

山里に行て籬の菊ひとしといふ事を

いろくりに籬のさくありけりたゞ一枝の霜とみしまに

月前の白菊といふ事を人々よみしに

おぼつかき花のありやの月影におく霜とのみ見ゆるまら菊

ある人

のどかある月にまかせて我のたゞ霜をぞはらふ宿のまら菊

法輪にまうで給ふ日あらし山にて

朝ぼらけ嵐の山の寒ければちるもみぢ葉をさぬひとぞあき

十月朔日殿上人大井にいきたるに

落つもる紅葉をみれば大井河のせぎにとまる秋にぞ有ける

いしのあかあるさくの只一本のこりたるを

岩間よりおふるにまるとき菊あればなべての花の霜に枯にき

長谷に入給ひて後中納言のまゐり給ひてかへりたまふ

とてあがたにより

見捨ての返るべしやの風やまぬ峰の紅葉ののせけのらぬを

御かへし

拾遺に風の山の
もさをまかりけ
るに紅葉のいた
く散待りければ
朝またきあらし
の山の寒ければ
紅葉の節きぬは
そなきさあり

のせけのらぬを
ハ解にしなきし
のな意也

いくへいはいくへい
かしのしの落たくへ
くははにに落たくへ
くははにに落たくへ
るべし

嵐ふく峰の紅葉をみぬ時もこゝろのつねにとめてぞくる
八月十五夜のいみじうわかゝりしにたやしの君のむす
めのとほきどころにいくへと聞給ひて
くもちあき後の今宵の月をみばやま邊の秋を忘れはてめや
長谷に紅の岡といふ例の草木にもあらず人の名もま
らぬ木どものはやしにてあるがいみじうめでたう紅葉
するありけりやしはの岡とつけ給へりけるが紅葉のい
とめでたき比中納言の御もとより
思ひやる心だにゆくもみち葉を見せで散す赤木がらしの風
かへし

名にたかき岡のあらしの寒からし紅葉の錦見にし來たらば
三井寺に入道の中將紅葉見にまうで給ひてかへるさに
松がさきのこうさうあざりのもとにより給ひたりける

入道の中將ハ成
信卿なり

落る葉のハ落る
葉の如く不定の
世になり

に聞え給うける
みそめていどくかへらめや紅のやしはの岡のもみち葉の色
あるじのあざりにゆづり給うけれバ
もみち葉にとめし心は松の葉の緑と共にかはる世もあらじ
またこれより
落る葉の常あらぬよにかでかは松のみどりに心とむらむ
あざり
きみが代をあが谷の松露の世にこゝろをかくる梢あればぞ
これより
松の雪きえかへりつゝ君が爲千とせをへても我いつかへん
あざり
法のためいといふかくぞおもほゆる水も心もすめる赤が谷
みくしげ殿にやしはの岡のめてたきを御らんせさせぬ

枝の字二つあり
上の枝の字は誤
字ならんと思へ
さ考へ得ず

運哥の上句さ又
一首を脱したる
なるべしといひ
かへしとある歌
連呼にたくつく
る例もなく意も
分かつし

雪ふれば花咲とのみみえしか
みわれかへし

蓬生の枝あき雪にうづもれて
雪の山をつくり給うて

音にさく越の白根のまら山の雪つ
よさむにして山の雪をしるといふを

夜さむみ山への雪を待どて
雪降日いひひろの入道の中將に

君がすみかをおもひやるか
かへし

君をのみみ山がくれにふる雪を
清昭阿闍梨のやまよりたてまつれたる

と山あるまささきのかづらいか
と問人のあき

かへし

山さむみ雪まづ積る宿のうへを
かへし

れく山をまらすがほにて年ふれ
また

雪ふらぬ伊邊尾心のさむけれ
禪林寺の僧正に雪の消ぬるうへに霜のおきたるつとめ

て

雪のうへにれく初霜の世の中い
かへし

人のよのはかあき程にくらふれ
雪降たるつとめて

同じくぞ雪の積らんと思へども
雪しに霜をか

二の句分たけ
れさよき古本
な得されは本
まいにまるし
るなり

雪しに霜をか
れたりまほの
それよりほか
く早くはさい
意なり

かへし

白雪にとふことのはにかゝりてぞ降くる宿も春ぞちする
ゆきよりがさうしに雪の山をつくりたるに物にかきて
さゝせ給ひける

音にさく越の白山をら雪のふりつもりての事にぞありける
かへしかねすみが女

降つもる雪をのみ見る白山のけふにかひある心地こそすれ
ひさしう里あるころ雪の山つくり給うたりとさゝて奉
りける

ればつかあいまも昔も音にたゞ名をのみぞさくこしの白山
かへし

白山をよそに思ひ我宿をいまのこしとやおもひありぬる
雪の年かへりてふりたるにうちの大殿へ上

こしを越に
來じをたれ
思ひなれ
思ひなりぬる
いへるあり
誤にあらす

後拾遺集に雪
のふりては
るあしたも
つけるさあり
いつれかふか
あり大政大臣
通公なり

ふる雪の年とともにな積りけるいづれかふかく成増るらん

御かへし

雪つもる君が年をもかぞへつゝ君が若菜をつまむと思ふ
あまうへの聞え給うける

積るども雪とゝもある年をらばかへるくもさみに引れん
女御ののこえ給ふとて

消やすき名にまたとへそ年をつむかしらの雪の高く成ども
長谷にすけし給うておはしましはじめたるとし雪ふか
き日おち女御の御もどより

れもひやる心ばかりの奥山のふかき雪にもさはらざりけり
御かへし

はやくくるす野といふ所におはしたりけるにともまつ

御かへし
ありて原本に
なし

雪を見給ひて

山里に雪さへともを待ければ野風をさむみたづねさにけり
中務のみやに八重さくう系給うてふみつくりあそびし
給ひける

ねしなべて開くる菊のやへくの花の下にぞみえ渡りける
宮

園の上の霜とれきゐて朝あくひとへに家の花をこそ思へ
春宮にてもものあど聞えける人位につかせ給ひて後忘れ
給ひにたるかときこえたりければ

九重のうちのかはれどみ垣もりおあじねもひぞ今も焼らし
れあじ春の始つかた

鶯の聲をまつとのかければとも春のまるしにあにをさかまし
ときこえたりければ

前の歌にやへく
のさあるにむか
へてひさへに花
をこそおもへま
よみたまへるな
り

まつまさりけり
さありしなるこ
誤りたるにや又
ゆるさひて下
に意をふくめた
るにか

風雅集冬十月一
日大井にまかり
てこれかれ給よ
みけるにれちつ
もるもみち集見
れの大井川云々
さあり

鶯のかけとまるしもあき物をうき今年よりまづまさりける

ある人うちのはの繪に焦尾琴といふ事よせ給うけるに

さりふ山吹木枯にこがれたるをよりぞ聲のまるべかりける

冬のはじめつかたかんだちめ殿上人 大井にあそぶとい

ふことを

流れゆく紅葉をみれば大井河をせぎにとまる秋にそ有ける

女のもとに

冬さむみいつも氷れる衣手を今朝の解てもかはらざりけり

その宮の中納言殿そめ殿の御おもひにて秋はてかた

にきこえ給うける

白河の紅葉をみてやあぐさまんよにふる里のかひあかり身

ときこえ給へりければ

常あらぬ思ひやあにかあぐさまむ山遊のいど木葉散つゝ

ある女に

まら山に年ふる雪やまさるらん夜半にかたしく袂さゆきり
とよのあかりの夜女のもとに人のきあひたれば

をみ衣すりすてゝきつる露けさの春の日すがら又ぞ忘れぬ

まらぎのうるまの嶋人きてこゝの人のいふ事も聞えら

ずとさかせ給ひてかへりごと聞えざりける人に

ればつかあうるまの嶋の人あれや我恨むるを知らず顔ある

かへし

はるかあるその嶋人のことの葉をちるといみけむ風の便に

かつらに人々ねはせしにそのわたりある女につかはし

ける

尋ねくる人の心もまらぬに山邊をのみやあがめくらさん

おもひやみにける人のもとより

まらきの新羅に
て三韓の一つの
國なりまの島人
るうるまの島知
の物いひの聞人
にいたきをたこへ
に千載集思ひに
入て四の句わが
この葉をさあ

嵐ふくもみち冬くれが今この葉たえはてぬらむ
とありければ
遠近の峯のあらしにこと問むいづれのかたか色のかはれる
おあじ人にあるやうありて
木のもとを我悔しくぞ頼みけるはさまからこそ雨も漏けれ
こおとこの御おもひにてそのほどのおはせざりけるを
程すぎてつかひしける
もゆれどもまらる人あきり年つもる思ひのうちの思なりけり
物いひける人のまた人に名たちけるころ秋つかたいひ
やり給ひける
かはり行人の心のみざりせば何につけてかあきをまらまし
ゆきより御むかひにまゐりてかうくゆふ所の有ける
とてその頃すけたいともろともによみてねとりまさり

はさまの葉問の
意なるべし
故に太政大臣藤原
白公に公任卿
の父頼忠公あり

ゆふ所の有ける
か考へたし

るうしけるハ論
しけるなり

まかりまうしハ
御いさまごひに
まぬるなり

るうしけるゆきより
あきも今の嵐の山の山たかみいかでのこれる紅葉あるらん
冬つかた麗景殿のはそどのにものおどいひける程にく
ら人これすけからもの、使にてくだるまかりまうしせ
んどて御ものいみにこもる日あけての年かうぶり給
るべければやがてうへにもさぶらふまじきよしいひけ
れバ

西へゆく月の常よりをしき哉雲の上をしわかるとおもへバ
これすけ

別路のよのつねおれや中々に年のかへらんことをこそ思へ
題あまたして歌よみけるに水鳥

さづるハ氷のさ
づるにころしを
りさづるなけれ
た

霜おかぬ袖だにさゆる冬の夜にかもの上毛を思ひこそやれ
ぬふ人もあき水鳥のけさるもいとづる氷にまかせてぞみる

ゆきより

冬の池の氷りゆくらん水鳥の夜ふかくさわぐ聲きこゆなり
女のもとに

たれしハのハ火
を兼たるハ
兼たるハ

人えれすつゝむ思ひのあまる時こゆるといふハ涙ありけり
たびく御返事きこえざりけれバ

雪やまぬたく山里の道おれやきのふも今日も跡のみおねバ
みちのくにのかみ質方くだるにまたくらやるとて

東路の木下くらにみえゆくのみやこの月をこひざらめやハ
かへし

此ハハしいと感
深し心をさめて
見るべし

こどづてむ都の方に行べきにこの下くらにいとまどふと
ありくにの大貳のつくしにくだるに

別よりまさりてをしき命かな君にふたゝびおはんと思へば
よの中さわがしかりけるとしつねにありける人たなく

此詞書新古今集
哀傷に世中はハ

なく人々多くな
ころ中將實方朝
臣身まかりて十
月はかり白川の
家にまかりける
に紅葉の一葉の
ころを見つけた
さあり

此歌上に結句た
もささなりさ
して出たりすへ
て此集の自撰に
はあらしるにや
いさみたりか
しく分かつた
所々おほく見
たり

あきかりて後神無月のつごもり方に白河にわたり給ふ
に紅葉の一本のこれるにつけて常にふみつくり歌など
よみける源中納言あき思ひ出られていとわかれにおや
え給ひければ
けふこそすのみでややまゝし山里の紅葉も人も常あらぬ世に
又の年はうさうしの御入講の日ためより
世中にあらましかバと思ふ人なきがおやくも成にけるかき
ある女に
白山にどしふる雪やまさるらんよはにかたしく衣さゆあり
人のもとにこしの方なるつかさある人の通ふといはれ
ける頃
くやくぞ春を待ける雪ふれどかよひやすき心ありけり
かへし

もろこしはかり
はるかにべだ
る意なり

くものもり名所
に又は是もは
るかなる意にや

すけては出家
なるふり

思ひやれもろこしばかり聞物をゆきかよふきの空も散らん
またつかはす
もろこしも夢見む程や遠からんこはよる方の道とこそきけ
水のはどりの菊
秋ふかみ汀のさくのうつろへば浪の花さへうつろひにけり
あきりどもの右馬のかみ
秋深み霧立わたる朝あゝくものもりある君をこそおもへ
女院の四十の賀に大將殿のし給けるかはらけ取て
君が代に今いく度かかくしつゝ嬉しき折にあはむとすらん
女院うせ給ひて又のとし二月初子の日女房の許に
誰にどかまつをも引ん驚のそつねかひあき今日にも有かき
なりのふの中將すけしてつとめて左大辨行成の世のは
かき事聞え給へりけるに

詞花集戀上にあ
だましくもあ
るまじかりける
女はせ侍りける
いにせ侍りける
つらばしきま
にき絶て後れま
いひ絶て後れま
をへて思ひあま
しけるいひあま
公任の御思ひ

思ひしる人も有ける世中にいつをいつとてすぐすあるらん
雪ふるに入道赤りのふの中將のもとに
ふれバまづ君がすみかを思ふ哉雪の山邊の志るしかりけり
こぞの六月にうせ給ひてまはすのはてつかたに入道
露の身の思に絶てきえにせばとふ言の葉も聞すやあらまし
かへし
夢とのみ歎きし程に明暮てとぬうつゝにみえやまぬらん
白河におはせむと有ける雨のふりければおほしやりて
白河の花をぞおもふ雨ふればたゝにもあらで色やまさらん
人の御むすめを聞え給けるにうちにまゐるべしとあり
けれバ
ひと度に思ひまりにし世中をいかんすべき賤のをだまき
をみにさゝれ給ひてのふかたの中將の服あるに赤ひも

此詞書いごみだ
りて自記なら
ぬ事いし上を
さるは我をわ
くし給ふとわ
たり給ふとわ
さかくへきに
玉葉巻下知へ
家にしは生侍
けるにちろ花
盛に又外へま
けるさてもみ
侍り

かりにつかひしたりけれバ
雲の上の光もいかゞ遠ければおほはしがたしすみそめの袖
かへし
晴すのみまぐるゝ方をちがむれば光も曇る物にぞありける
山里のはつ秋といふ題を
いづこにも秋なきぬれど山里の松ふく風のことにぞ有ける
周防守とよみつの朝臣の家にまはしければしけるを三月
十よ日花のいみじうおもしろう咲たるはせに又はかに
わたり給ふとて
あだなりと思ひあはてそまだちらぬ花より先に移るひぬとて
御かへし
おろかにも思ひぬ物を今年より人にあかるゝ名をちらす哉
秋の暮つかた母上の御もとにまゐり給うけるに日頃も

あたる君かな
あわ通音なれ
わたるさかいふ
なるべきか又
わの寓談なるへ

ちやませ給ひていとよわけにちらせ給へれば女御殿に
聞えさせ給ひける
風やまぬ秋の林にもみぢ葉の色いかにと見るぞかちしき
八月二十八日かつらどのに右の大殿の北のかたさどお
ひして稻からせてみ給ひけるに
千世をへてかりつむ宿の稻おればおほくの年をわたる君哉
山里の紅葉の時わかぬか秋のちかばにいろふかくみゆ
とやいはましと思ひてふどころがみにかきてもたせけ
るを大殿の御ひとつ車にておとし給へりければかへり
給ひてまたのあしたかくやいはましとちんねばえしと
て聞え給へりける
山里にまだき散ける言の葉を宿のあるじやかきといめけん
正月十日あせちの大納言きこえ給ふる

中宮の上東門院
影に後一條院
まに七夜に秋の月
て七夜に秋の月
影のさかにも見
おるかな下句お
なし

つまんさを思ふ
にたつてにまん
たがかりつまん
さすらんをかく
誤たるなるべし

白妙に雪のふれゝ水鳥の青葉のやまもあらじとぞおもふ
祭のつかひにいづるさいしの御車に聞えたりける
あふひ草心にかけてれもひやるおのが車をさしなまかせん
中宮の御うぶやのいつかの夜
秋の月影のせけくもみゆるかちこやちがきよの契あるらん
圓融院かくれさせ給ひての春の世の中ぶくある頃つれ
くちりければ歌よみける
春雨
草も木も色づきわたる春雨に栲のみまさるふぢのころも手
驚
常ちらぬ音にぞ聞ゆる山里の山邊にさちくうぐひすのこゑ
若菜
此春のたが爲にかの水もくみ野べの若菜もつまむとぞ思ふ
霞

戀侘て君があたりにたづぬればのべの霞をわはれどぞみる
歸る雁

思ひえる人もあきよにうらやまし愛世をすてゝかへる雁金
柳

墨染のさくらあらずの青柳のみどりの袖をかけてみてまし
ちる花

花だにもはかなくちるのうき物を敷あらぬ身の頼がたさよ
春の田

春の田をあぞ打かへし悲しきいたのみ少き我身也けり
戀

さまざまに思しよりの世中にたぬぬの君をおもふあけり
父おどいうせ給うての頃たきもの人のこひたるつかは
すどて

なぐはなほなご
の涙敷をにては
我身なりけり
すいてるにば
ひたり

一本に三の旬が
きれにひさあり
此方よりし

花だにも散つる宿のかきはにの春の名残もすくあかりけり
三月つこもり服におはするころ

別れにしかげさへ遠くありゆけば常よりをしき年の春かあ
御いもうどの女御

春えらぬ宿に花もあき物を何かのすぐるえるしあるらん
四月服あればころもがへもし給て

墨染の衣あがらのけふあれどかはれるものいひかし也けり
ぶくぬぎ給ふどて

墨ぞめの衣にそへてあがせともつきせぬものい涙なりけり
ひがし山のあたりに人々もみぢ見に行て

色ふかき峯の紅葉をたづぬれば山路よりこそ秋のゆきけれ
一の宮の御めのとみぶに物のたまひけるをまたおどり
の人かたらふとき給ふ頃ものいはんといはせ給うけ

ハ染の衣なから
に服の衣のま
な着かへる今日
れどなり

湯をあぶる事を
あむさいひ
あみて下すも
なればかくよめ
るなり

ればゆにをりてといはせたりければ

哀ども猶きよしとも思はえず人のありまのゆとしきかねば

かへし

柚山におろす筏もあるものをゆのみやあむと人のいふらん

序品

くさくさにちりかふ花の古の風にまかせてふるにぞ有ける

方便品

ひとことによりてぞよくに届ければ二も三もあきあきり是

譬喩品

かどでに三の車と聞しかどはてのおもひの外にぞ有ける

信解品

さすらへし昔のあやと知ざりさいつを任する今日の嬉しさ

藥草喩品

うるふはうるほ
ふなり

ひとつ雨にうるふ諸木の異かれを終に一本に歸らざらめや

授記品

改めてふかさ心を悟りぬるを今日のうるにぞ有ける

化城喩品

古の契もかひやあからましやすめしみちにすゝめざりせば

五百弟子品

きてふしてどこゑひあれば衣手にかゝる玉どもさめて社みれ

人記品

ふたぢがらみよの契の有ければ行末かねてゆふにぞ有ける

法師品

法とかひみひろも外にあかりけり唯心をぞすますべらなる

見寶塔品

そのかみの誓たえねばいくよどもえらぬ姿を空にみるかあ

提婆品

みかひとを佛の道にいれつれば佛のあたもほとけきりけり
さはりればみ涙を分こし身をかへて蓮の上に居ところみれ

勵持品

さまざまに憂世の中を忍びつゝ命にかへてのりをとくらん

安樂行品

世をそむくくせも心をさめつゝ誓てすゑの法をひろめん

涌出品

たらちねの親より社に老にけれ年あらがひを人もまづべし

壽量品

出入と人のみれどもよとゝもに驚のみねある月のせけし

分別功德品

さくまゝに皆人道をますかゝみ行末までもこらしつるかあ

のりをとくらん
一本にのりを
しまんさあり

隨喜功德品

傳へつゝあな尊とゝもいふ人の其ひとことにまゝ事ぞあき

法師功德品

法の雨に皆からきよめつくしてはさりの外を何か尋ねん

不輕品

うちのるもさても種をし植つれば終に御法の空しからぬを

神力品

めづらしくのふる舌にて御法をば誠の中のまことをぞ知る

囑累品

いたいきを猶數々ぞかきあづる得難き法のうしろめたさに

藥王品

明らかに照す程こそみゆる哉身をばをしまで法をおもへば

妙音品

うしろめたさに
いふあんしんさ
にさいふこゝる
なり
こそあかになて
結びたるいさめ
つらし誤字にや

しるべは案内者
といふこゝろな
り

此十のたどひの
皆人の身のほか
なき事を物によ
りそへていへるな

法の爲きぬとみれども身を分て至らぬ方のあらじと思ふ
普門品

よをすくふうちの誰かいらざらむ普き門を人しさゝねバ
陀羅尼品

限りなき法の方にときそふるまもりいとい頼もしきか
妙莊嚴王品

闇にのみまよひきつれば契てしともぞ道びくまるべ也ける
普賢品

尋ねくる契しあればゆくすゑもあがれて法の水のたえせじ
是はかき給へりけるおくに

法をむることきこえねど静なる光のうちにてらさゝらめや
ゆいまの十のたどひ此身あわのことし

爰に消かしこに結ぶ水の沫のうき世にすめる身に社有けれ

月影の月影の
やうにさいふ意
我身のものを文字
ひなるものをの
意なり
かけるふい出の
名にもいへこ
いは陽炎ないへ
り

此身水の月のことし

水の上にやどれる夜半の月影の澄とくべくもあらぬ我身を
此身かげるふの如し

夏の日の照しも果ぬかげるふの有かなきかの身どの知すや
此身芭蕉葉のことし

風吹バまづやふれぬる草の葉によそふるからに袖ぞ露けき
此身まぼろしの如し

この身をば跡もといめぬ幻のよにあるものと思ふべしやは
此身夢の如し

常ならぬ此身の夢の同じくうからぬ事をみるよしもが
此身影の如し

世中にわがあるものと思ひしのかつみの内の影にぞ有ける
此身響の如し

有とさく程にきこえず成ぬれば身の響にもまさらざりけり
此身行雲の如し

定めあき身の浮雲にたどへつゝ果のそれにぞ成はてぬべき
此身いさびかりの如し

いなづまのてらす程にの入息の出るまつまもかいらざり
中宮のうちにまゐり給ふ御屏風歌人の家近く松梅の花
などありみすの前に笛ふく人あり

たのぶは枕冊
子に所々見はた
る齊信卿なり

梅の花にはふわたりの笛の音の吹風よりもうらめしきかき
宰相中將いれりたのぶ
ふえ竹のよふかき聲ぞきこゆある峯の松風ふきやそふらん
中宮のうちにまゐり給ふ御屏風にかの海づらある人の
家の門に人きたり人出てあひたり

昔みし人もや有と尋ねてのよにふることをいはんとぞ思ふ

わが門に立よる人の浦ちかみ涙こそみちのまらるべかりけれ
翁の鶴かひたる處

ひあづるをすだてし程に老にけり雲井の程を思ひこそやれ
花山院の御いれり

ひさ鶴をやしあひたてゝ松原の陰にすませむ事をしぞ思ふ
山づらにけふりたつ家あり野に雉もあり道行人たち
としまりて見たり

此邊の詞書いつ
れし書にいて
さ短かく書て事
のさまよくきこ
わたり心をさめ
て見るべし

煙たちきいすまばあく山里のたづぬる妹がいへぬありせば
人の家に花の木どもあり女硯にむかひてゐたり
行人につげややらましわが宿の花の今こそさかりありけれ
人の家に松にかゝれる藤をみる

紫の雲とぞみゆるふちの花いかかるやどのまらしあるらむ
女院の四十の御賀の屏風の歌もしやとてうけたまひり

けれどさもあざり花あるどころ

春たちてさく花みれば行末の月日おほくもおもほゆるかき

松のねほかるところにて六月はらへまたる所

姫松のまげきどころにたづねきて夏はらへする心あるらし

祓する河邊の松もけふよりの千世を八千世をのべやまつ覽

七月七日女男にもいひたるけしきまたる所

わが戀の棚機つめにかしつれど猶たゝあらぬ心地こそすれ

花山院のかゝせ給へる紙書に歌つけて給りたりけるに

人々さるべき所のつけはてゝあかりければ人の鶴かひ

てふみひろげてゐたる所

鶴あらぬ友のかけれど文みればむかしの人に逢こゝちする

人の顔をかくしてあやしき事またる所におぢにて

我顔の露もらさじと思ふともはなげぞいたく紅葉しぬべき

かしつれど猶たゝあらぬ心地こそすれ
機に手向たれ
よしと云意也

大路にてあやし
き事したる所さ
かくべきなかく
掛るか詞書にあ
またあり心をつ
くべし

繪物語にぬびたるやもめあがめてゐたる所

あかむれど曇らぬ月のうらやましいかたで憂世を出て住らん

とりあつめて予とよめる歌

安からぬまの思ひも消ぬらし又とりあへず氷りゆくに

菊のこさこそといへる女の所

いかばかり契し花の露さらんたきてしもいと哀とぞおもふ

かへし

結びけんちぎりも今や朝露のれくみえぬべし花のどころは

これもねなし事あるべし男のこゝろにもあらぬことさ

といひたる所に女きて

打解て頼まざりせば露の身のまのびに袖のまぼらましやの

かへしとて

わりなき心の外にれく露を袖のみだれにかくるあかりけり

くしらばくも
らぬの誤にてな
き

わりなきはな
けなきはさ
にねなし無
る心なり

ゆめばかりの
こしむさいふこ
いるなり

これもれあじさまの事
くるしき人にかたらぬ夢路にて又も逢夜や有とみるまで
かへしとて
夢ばかりまどろまでのみ過すにいかかある世にか又の逢へき
繪に梅の木に鶯のなきてすのこに琴ひく男あるところ
にすの中にて
鶯のさきにか君がさむつるをかつうちいでむ梅がぬのこゑ
春のあか家にあそびしたる處にまらうとの來て
青柳のかた系により出けれどさしてぞきつる梅のはさがさ
女のとあぼしくてぞ女御の御
花笠をさしてきつれどさくら入春の山邊のたよりとぞみる
花山院の御歌合のやうある事せさせ給ひけるに月を御
秋の夜の月にこゝろのあくがれて雲井に物を思ふころかな

うちはへては時
長く久しき心な
り

いつもみる月ぞと思ふに秋の夜のいかかる影を添るある覽
雁これしげ
我せこが旅寐の衣うちへてまつかりがねの今もあかあむ
たかたにて
わきも子がかけて待らん玉章をかきつとけたる雁がねの聲
梅殿上の歌合に雪を
梅が枝にふりしく雪のひとせに二度さける花とこそ思へ
大殿石山にこもりたまひて題どもして歌合を給ひにけ
るに題をよみてありけるにみねの上の郭鳥
山邊だにねかたき物をほとゝぎす都の人をまちやかぬらん
水の上にもゆるる螢にこどひむふかき心のうちにもえすや
山里の卯花

れかたき物を
上に郭公を待
と加へて聞へし

かきれ玉葉集に
ひきりさある方
よるし

卯の花のちらぬ垣根の山里の木の下やみのあらじぞ思ふ
草の庵の橋

逢生のまげさいへに橋の香をたつねてぞとふべかりける
くれがたき夏の日

暮がたき今日にてまりぬ石山の山のいのちを祈るまゐるし

影少なきよひの月

忘れてもあるべきものを中々に雲間すくあき月をこそ思へ

かくて奉れたれば

五月雨はながむる程のみづくきに君が言の葉みるぞ嬉しき

かへし

言の葉をみるに袂のぬるゝかき軒の玉みづかすもまられず

中將におはしけるを冬の夜さうくしとて歌合のやう

あることし給うけるに

たてまつれはた
てまつらせにて
らせの反れなり

五節帳の試ひ
十一月中の丑の
日なり公事根源
にくはし

もみぢ葉の雨とふれども空晴て袖より外のぬれずぞ有ける

臨時の祭のつかひしてかへりたるにふねにすけあきら

石清水かざしの藤のうちあびき君に予神もこゝろよせける

かへし

水の上こゝろはしらす石清水涙のをりこし藤にやのあらぬ

おきと折にあがふる

いはし水昨日の藤の花をみて神のこゝろもくみてまゐりにき

五節のちやうだいの夜中宮の御方にかんだちめ殿上人

まゐりて

こゝへの雲の上人打むれてくれとひかげの ざりける

右大辨中務の宮にまゐり逢んと言てみえず成にけれぬ

秋の日をあがめくらせる夕暮は月待よひにねとらざりけり

おなじ宮にまゐり給ひたる人に契給ひたりける事あり

つぎめての朝は
やくなり

ければ心もどきくてまだ出給ぬに出たまひにければ
つとめて

恨めしく歸りけるかき月夜にのこぬ人をだに待どころさけ
御かへし

夜を寒み月夜よしともつけざりし宿も過うく思ひしものを

五月ばかりれあじみやにまぬり給ひてこのころすぐし
てまぬらんと申給ひて秋に成ければ宮より

すぐすにのすぐ
さんほごいたの
めしなるへし

五月雨をすぐす又程とたのめしを秋の風こそ先のきにけれ
御かへし

うつろはでゆくすゑ遠き松の枝の初秋風をきにとかひさく

内藏頭たき物こひしを梅につけてつかひし給ふとて
降雪にまがふばかりぞ梅花をればにはひもどまらざりけり

かへし

かつかしき袂にかゝる梅が香を風に知られぬ事をしぞ思ふ

庭はらふ撫子の引きられたるを見てあがふる

すきもの好色
人も物すきな
る人もいふ

すき物を花のあたりによせざらばこの床夏に根絶ましやの

名だての面をれ
にて花の不面目
さいふ意也

宮の女房すけの君といふ人
床夏も花の名だてに思ふらんことすきものねしり顔なる

といひて後者がふる久しうみえざりければやりける
いかにぞやあのみりし人もかれぬれば過にし花の折ぞ戀しき
かへし

常夏におもひし出ばいまよりは花の時あるみどやありあん
せいせう阿闍梨夏のはじめに聞えたりける

白雪のふかくつもるとみし程に夏のみどりに成にけるかき
かへし

常なき世の無
常速の世をい
へり

みなのささ一本
みつのささ一本
本みなの川さあ
りさして常陸の
名所なり

人にだにのだに
はさへもつてさ
いふ意なほいま
だそのうへとい
ふ意也

雪消て花さへちりぬかくしつゝ常なき世をやたに過ぎさん
又阿闍梨かへし

をやみせず流れておつるみちの里月日の過るいづちある覽
かへし

行かたも去らずと思ひし年月の我身に積るつみにぞ有ける
又

わかゝりし昔年月のせけくてつみのふかさのどくぞ消ぬる
女院にて權を見給ひて

あすまらぬ露のよにふる人にだに猶はかきしとみゆる朝顔
道信の中將

朝顔を何はかきしとおもひけん人も花はさこそみるらめ
れきし中將のかうかいのまくらはこにああるかへしや
り給ふとて

かみかきを返すくもみる時ぞいろ好^{おも}と^かの去るくみえける
又かへし

かしあべてもみづる時の神垣の柳葉さへや去るくみゆらん
又かへし

もみぢ葉の時にかはるを柳葉の常ある色にいかでありけん
かへし

時さらでよにふる人もみぢ葉の移りやすある色の習はせ
はうりにためもと去ほうまうであひて音せで出にける
つとめて

さみのよにあふ事かたき龜山の浮木をたに返すべしや
かへし

天河跡をたづぬるよありせば逢ふことやすき浮木ならまし
野分したるつとめてあかふが家の北に故入道殿南に

ほうりハ法師な
るへしまほうの
しほちの誤にか
あらじ

故三條殿すませ給ひけるにれば風の吹ければたてまつ
れる

我宿の野分のふかんどありよりわれ増りたる心地こそすれ
かへし

隣より荒まされりといふなるのいかなる風か身をバ吹らん
さねよしといふ人久しうこもりぬたりける頃雪のふり
けるつとめて

いとしく
俗にた
さいふ
意なり

いとしく常ちらぬよを歎く身に逢みぬ程と過すべしやの
かへし

心にもあらぬ道にやまどふらん雪ふるまでの思はざりしを
さねかたの少將祭の使せしに貝を花にいれたりし扇を
やり給ふとて

わふぎをバ箱床しとぞ思ひこし今日のかひあるまゝるし也鳥

かへし

いかでかひかひの有とのみえつ覽袖の裏にもよせじと思ふに
宰相にえなり給はざりける九月九日爲元法師

よのなをきく
にたもこの
に菊をかれたり

世中をきくに袂のぬるゝかち涙はよそのものにぞありける

かへし

かくれるて猶さりがたき菊のはな籬のもとをとふや誰ぞも

ぞいハソマアの
意なり

又

世中をきくにのことと思ふべし袖の露だにちる世ありせば
かへし

常ならぬこの世の花をみざりせば露の心はつらくや有まし
藏人これすけがぬきいでにかうぶりうべき頃椎をおこ

ぬきいでハ
に別段に推
せらるゝなるべ

すどて

みを君にまかせつるあり椎柴のかいらん世まで頼もしき哉

身に實をかれた

かへし

玄ひ柴にそむる衣のかはるとも此みをよそに思ひざらむ
事のついでにむかしのことをいひ出てあけの命婦
れもひ出るありし昔の在明の月あがら世のかはらざりせば
かへし

忘られぬ其夜の月いふりにしを新らしくのみおもはゆる哉
又

花やさく有しあがらに鶯のさもあたらしくてもはゆるかき
とて鶯をさくらの枝に居ておこせらればその枝を宮の
すけのがりやり給ひたりけれバ
雲井ある櫻の枝をうぐひすのふみ絶んどもれもふべしや
かへし

さくら花まづえをあらす鶯のふみたがへたる春にや有らん

宮のすけの皇后
宮の次官なり
かりはもさへ
いふ事なり

石山にまうて
曉かへるとて月
を見よめる前
大納言公任さし
の句春の山々四
と續後拾遺集春
下に見たり

曉月夜に石山より出給ふとて關のあきたにて月のいら
ぬさきに歌一つとの給ひけれバ

相坂の關まで月いりてらさあん杉のむらだち木ぐらかるらん
といひたれバ

ともにゆく月あかりせば朝ぼらけ春の山路を誰にとりまし
かけまさが露草のうつし聞えたりけるやり給ふとて

朝夕につねからぬ世を歎くまにうつし心もあくなりけり
かへし

葉末より深く染てし色あれば世のうけれどもかへりやのする
月のあかゝりける夜一品の宮に殿上人あまたまゐり給
ふるにくちすさびに松が浦嶋どの給ひたりけるを聞て
うちの人

浪だにもよる事かたき松嶋をいかでか蟹のありなしを忘る

後拾遺集性法師
音にきく松の浦
島けふ見るう
すべ心あるあまも
すみけり

新後拾遺集戀二
に殿上人々一
品宮にまゐりて
物のいひける人
雨のふりけるは
つそきかへりて
つさめてつかり
しける前大納言
公任あつてこし
空のまづくはし
下同じ

かへし
浦浪のむかしの跡のまゐるければ尋ねてきつるこゝろ有らし
うち

いかでかは昔の跡をたづぬらんさかしき人にあしと社さけ
又

さかしかる人もなければ行すゑの契にきつる松がうらしま
御どもの人の雨ふりぬべしと聞えければ

秋の夜の雨にもあにかいそぐべき此頃ふると思ひあしつゝ
かへし

雨あらずではかき空にふる人は露にもぬるゝ物とこそさけ
ねれてかへり給ふとてそちよりつとめて

あはでこし袖の雫の秋の夜の月さへくもる物にぞありける
かへし

たもふぢちへん
か思ふぢうし經
んなり
露草の月草さも
いへり衣なごな
す草あり

人のゆき霧の籬にたちどまりくもりあがらど我のあがめし
その秋もろともにものしける人にかくあんなりしとい
ひやり給ひけるついでに
憂世に心すこしも行やらで身さへどまらぬ跡あもらしそ
かへしたのふの少將
慰むるかただにあらば月影のすむべきよとの今のみやまゐる
みちのふの中將

世中はあるかあきかぞ今はたにおもふ心をおもふどちへん
露草のうつしを宮のすけのもどめければ色あろきあんな
有るとの給へりけるをとり奉るとて
うすからん花を侘てぞ思ひつる猶こゝまでもちらせ惜むあ
かへし

惜むべき程だにもあき花よりも先かへりぬる色にぞ有ける

さいなかけたり
けるいかなるこ
しもしわきがた

うまこそがかへしどてきたるをみれば
 のがるれど疎ましく社思をゆれこやなき人のみその成らん
 とかねすゑがよみかけたるかへしを
 今更にわがき惜くも有ねどもみそのとつぐる事の佗しさ
 越前の前司の松のみを奉らんとときこえてやとてあり
 てければ
 暮がたき春の日よりも契りてし君まつのみぞ久しかりける
 八河といふ所におひしたりけるにさゝをかけたりける
 宿らでものどけくもあらぬ人のよを露の床しと思らんやの
 ためもと新發意のておればたつねて
 わくるまのほどだにもおき露の身の此世中のこゝろ細さよ
 又かへし
 草枕はかき物とこの世をバ鳴むしのねやねもひまららん

此歌ごし心得れ
 集をうつつ時後
 人のけき此れし
 なるけに秋風の以
 の如く秋風の以
 下野宮花まで女
 小野宮花まで女
 御の贈答なれし
 ば全まきれ入し
 なるべし

小野宮の右大臣殿式部卿のみやの女御のもとにまゐり
 はじめ給ひて三日いとつれづれあるにこよひまゐりて
 ものがたりも聞えんと有ければ
 秋風の袂すいしきよひごととに君まつやどひとやうらみん
 かへし
 うらむべき人をバまらで秋風を花をあやきたのみける哉
 おはしおれしころ焼物を聞え給ひたりければ
 いにしへの契りし宿の女郎花香をむつまじみ知もこそすれ
 こ君ときこゆるかへし
 女郎花同じ野邊ににおふれども契しねにあらすどかきく
 此歌ども心得ねどもとのまゝと本にあり
 宮のすけの立といふ人女郎花のわかきをあん両ぼうと
 いふを聞て

りやうほうといかといふべき女郎花佛の種をたつと社きけ
かへし

をみかへし種たてましや白露の□ききころを世の□

竹に氷のつきたるを女御殿に奉り給ふて

君がため雪間を分て尋ねればひとよこもれる竹にぞ有ける

御かへし

鶯の氷れるたけのよをふどもかゝる雪間をたがたづねまし

ふちの天皇をい

うちの御使にてきさいのみやにまゐりていみじうまひ

られてつとめて
今よりの思ふ事をも言^までへんまふるのつらき物にぞ有ける

かへし

ことわりや物も心にまられにき思ふ人やのひとをしひける

ひらをかへすとてたのぶの少將

こくをも見れば
一本さくをし見
ればさありこれ
よるし

今のとてとくをもみれば年のをの長く契しかひやあからん
かへし

年のをに結びかけてし契あれば心のこりをとくといはなむ

ひざりば火入な

宮にえちごとてさぶらひける女房にひとりのはひをや

かせてとてあづけ給ひたりけるを奉るとてあかき紙に

かきて火のやうにて埋みたりける
敷あらず埋もれたるが思ひにのあたりの灰も山とこそあれ

かへし

埋もるゝけのひをみれば人まれず思ひや富士の煙もたつ

是のはやうの事あり河にまうでたりしに舟にてかう

ぶりやなぎさいものたいふくな君

いにしへの露にぬれにしかひもあくあどか柳の緑あるらん

たれどかればつかあければ

さいものたいふ
の左衛門の大輔
にてくは君の名
なるべし

四の句のこまく
さすいやわきか
たし誤字あるべし

から國のむかしの事にくらぶれば松におどらぬ柳ありける
 きむさだの中將
 むかしよりわけの衣の名のみして柳色あるとしをふるかな
 うこんの少將さねよし
 いにしへのちにもかいらじ青柳のごとくさすかや緑ある覽
 ちばかりをいでふね辨
 さしてゆく柴かり小船さををいたみ
 といへばちもつく左衛門
 まづこがるゝの心ありけり
 春のくれぬることといふにおあじ人
 春とゝもにゆく船路にもおもふかち都の花は散はてぬらん
 ちといふ程に三嶋江といふちをちん申すといふを聞て
 思ひえるうさみ嶋江の水ちればゆけさも行れぬ心地社すれ

ちかみつ

行過てこのみ嶋江にいとしく遠く離れんことをしぞ思ふ

ちがらの橋にて

橋柱ちからましかばちがれての名を社さかめ跡をみましや
 くらうなる程に住吉にまうでつきぬ松風波の音きこえ
 しにたがはずをかし人々みてぐらのついでよ歌よみて
 たてまつれとこひたればえさかすその夜は其わたりに
 とまりて曉月夜に濱づらをゆけばいはむかたちくおも
 ちろし

みてぐら神に
ちる物をいふ

とまりて舟の
中に寐てなり

かくばかり歸るものうさ住吉の岸にいかで浪のよすらむ
 こと人のえさかねわかすひいきのちだにて海士の綱
 ひくにいとどもこひて放たす濱邊は何事もをかしきに
 あまの盪やくことに見ゆ

ふな君の公任卿
のこころなるべし
土佐日記に貫之
我事なふな君さ
いへるにひさし

もしはやくけふりにあるぐあま衣霞をたちてきたる成べし
少將

あま人のやくやもしほの立そへば雲の波こそ深く見えけれ
いかあることを見けるにかふ赤君

へだてなき海邊をわたりゆく時も人の心のくまのわかれず
ひさみの濑松ばらのほどにてまばしやすらひてかさき
より越つてつくゑ松をみればげにゆゑさくのあらずこゝ
にてこそくらすめといふ其夜のきしづらに泊りて曉
に出ていとおもしろげなる所々見むとて玉津嶋にまう
でんとてあるに道ればつかあしあさいふほどにかみ人
たちたものさきにつかうまつらんとていできたりあり
あひの松ばらよりゆけばまこも草生まげりさはに駒あ
るにをかしう緑の松こぐらさ中よりまら根のたつともみ

いひやらん方な
くひいほうもな
いひいふ意にて
いひしらすさい
ふに同じ
いひ中々い
ひたらばかへり
ての意なり

どやさるやうくみやしろにいたるやせいりえのやと
りに蟹の家かすかにて船をもつあきあみどもほしあど
またるを都にのかりてをかしみやしるにまうでつき
てみてぐら奉り所々めぐりて見ればいひやらんかたあ
くおもしろくをかしきをおもひとにみせぬをたれもか
くれもふべしをこのありさまいは、中々おとりぬべし
かゝる所にて中々に働もいはれぬものにあんありける
かへさにうしろのいはやを見ればやどけのいとけにて
おはするを

少將

あま人の法わたしけんまるしにや岩屋に跡をといめ置けん
蟹のすむ濱のいはやの佛にの浪のはさをやをりてよすらん
といへば

彼岸の遠きを去りて岩かけにみかけをやどす水のつきかな
和歌の浦よりかへるにおもえろきさくらや老たる海士
をみて少將

年をへてわかぬ浦なる蟹あれば老の浪にのさはぞぬれける
吹上の濱にいたりぬ風のいさをふきあぐればかすみ
の柳曳やうきりげに名にいたがはぬ所ありけりさたか
やまのはうの前人々などみえたりていとおもしるし駒
をひきとめてやすらへば蟹の盤たるゝもいと哀あり
物思ふにみれば忘るゝ濱風にすむあまいかに盤をたるらん
粉河にまうでつきて風のもりといふ所に

いとこへも花のあたりにあたなれをいかに散らん吹風の森
圓融院のありるさせ給ひての日少貳のみやうぶといふ
人あはれといふをききて

見たりてのて
文字ハ併なるべし

いさこへも例の
漢字なるべし分
かたし

哀たがたいさのみやの思ふべき萬になげくひともある世に
冬の初つかた観音湯本より久しう御讀經にめされぬと
聞えたりければ
霜はやみうつろふ色は菊の花をどめの袖もかくこそのみめ
かへし

をど女子か袖ふる霜のうちはへてたわまぬ菊の心を去れ
みちのぶの中將よみたる歌ども書あつめたるかたみに
みんといひやるとて
斯ばかりふる事かたき世中にかたみにすめる跡にぞ有ける
かへし

ふることのかたかくあるとも形見なる跡の今こむ世にも忘れじ
賭弓のつとめて中宮のすけ
弓張のまどゐやいかで有しそのいるかた山の遠さかりけん

心をしれのを
ハ助辞なり

に三つ有て耳だ
ちたれど古昔に
ハたれど事折々に
ありかたくなに
いふべからず

旋頭歌ハ五七七
五七七定格にて
萬葉集古今集に
つれも同じきな
此れも七五七は
七五七のよりな
このころよりな
いなる一體の出
しなり

かへし

かた山の雨に紛れてやみにしをかつくさくと誰か定めし
こまの内侍のこはく聞えたりけるをほどへて秋立る日
やり給へりければあどてか今までと聞えたりければ
もみぢ葉の露の色ある玉あれば秋を待でいいかいみすべき
かへし

秋深き海のそこある玉あれば露まつほどもおきてこそみめ

のふかたの中將まうでむと聞えてみえずありにければ
又つとめてやり給ける旋頭歌

おもふぞちねてはかあくもわくる夜を

人のもとにある事をの給ひて
長しといふ人まつ時の名にこそありけれ

世中は水にやどれる月かれやすみとくべくもあらずも有哉

たまうて三つあ

こそをどしにて
結ひたる例詞の
玉の緒にあまた
例をあけたるな
みてまゐるへし

おもひいつやま
一本に思ひいつ
やはさあり

頭にありたまうてうちにまゐり給うて花山院の御とき
よにつかさる家をわたりたまうければいひいだしたり
ける

雲井こそ昔を空にあらねども思ひしことよかはらざりけり
かへし

頼こし月日いたいに過にしをいかある空の露にかあるらん
人の尼にありたるに

あはれともいはで思はむ行す糸の蓮の上はおもひいつやま
かへし

とふにだに置所あきはちす葉の上までかゝる露ぞかあしき
薫物あはせてうへに置いていで給にければ少しとめ給
ひて女御の御

残りあふかりぞまにける焼物の我ひとりにしまかせてしがあ

こそついでに
つらし下に
ふくめたるに
ひはのをハ
の緒にヤ

と有ければ
くゆるべき人にかりて終夜このわたりこそ下こがれつゝ
ひはのをかへし聞ゆとてみちかりの中將
秋霧のたき引小野の山路には言の葉さへぞふかくかりける
かへし

ことの葉のちる山のをハ秋風のすぐるまゝにぞ聲増りける
花山院ねりる給ひての年の佛名にけづりばなにさして
みわれの宣旨のもとへ聞えたりける

新古今雜上に結
句花のいろかな
な花のいろかな
さあり

程もあくさめぬる夢の中あれどそのよに似たる花の陰かき
かへし
みし夢はいづれの世ぞとおもふまに折を忘れぬ花の戀しさ
またの年おきて折さねかたの中將
いにしへにかはらぬ花の色あれバ花のむかしの昔こひしき

見し夢はを新古今
今集にハ見し夢
なこあり

なかりけれハの
上に落字あるべし

かへし
むかしみし花の年々似たれども同じからぬを思ひまらきん
かまくらといふ所にねはしたるにさかりければ忘草を
とり給ふとて寺にかくいへとての給ひける
忘れぐさかりつむ程にかりにけり跡もどいぬ鎌倉のやま
かへし

あり侘て枯にしやどの八重葎いづこをさして君につげけん
山里をはじめてまむかすみ

たれがさいひて
さむるなるへし
ささちめたる少
しさいのひかりた
きてにをばなり

春がすみほどへてたれか山里ハ愛世の外をとむるあるべし
入道のとうにあひ給ひてあしたに
雪ふかみ山路もまらすまどふ身の道ゆく人やあるとまつ哉
かへし

皆人をよそにきくとも雪深みひとつ山路にいらんつまとて

そさばみなから
は卒塔婆を物名
によめるなり山
千載集雜中しは
にのほりなひは
しおこなひなこ
し侍りける時よ
み侍りける公任
今はさて入なむ
後云々さあり

かすがにまうで給ひけるにけぶりたつ山里をこれか
こまの里と人の聞えけれバ
朝まだきあさるる雲とみえつるのこまの、里の烟ありけり
そとばある所を過給ひけるにこれを題にてよまむとて
おぼつかちそとのみながらいその上古き都のいづれ成らん
山にきよき事をせさすとてればしけるにいたづらあり
けれバ
今はとて入あむ時ぞおもほゆる山路をふかみとふ人もなし
宮の女房へむつがせ給ひしにまつりしてつがせたまう
けるを少將といふ人まけずとあらがひけれバ
さしそへし春日の山の三笠山まつりし人もいかゞさだめん
かへし
三笠山わきてや君がまつりけんかねていのらぬ人の爲に

詞花集雜下に三
條太政大臣身ま
かりて後月を見
てよめる前大納
言公任さあり

續拾遺集雜下に
道長公三の句そ
れなからさあり

山にかはしける頭たのぶの中將
世をうしどのがると聞バ我のいどい是より深く入ぬべき哉
かへし
山よりも深きところをもとむれば我心にもきみのいらあむ
九月十五日みやの御念佛はじめられける夜あそびあど
せられて月のおぼろあるにふるき事あと思ふこゝろを
人々よみけるに
いにしへをこふる涙にくらされておぼろにみゆる秋の夜の月
權辨
雲間より月の光やかよふらんさやかにすめるあきの夜の月
かへし
逆葉の露にもかよふ月あればおちこゝろにすめる池みづ
これを聞給ひて左大殿より

同上公任かへし
さあり又初句今
はたさあり

君のみやむかしをこふるよそあがら我見る月も同じ雲井を
又

いまよりの君がみかげをたのむ哉雲がくれにし月を戀つゝ
ときこえ給ひたりけれバ

いまよりのあみだが峰の月影を千世の後まで頼むばかりぞ
女院の住吉にまうでさせ給ふるに式部卿の宮の中將の
うちのおほんせじにてまゐり給ふるにつけて左の大殿
大宮の大夫の御もとに小野の宮

都人ありやと問ひ津の國のこふのわたりにわぶと答へよ
と聞えけれバ

さそのれぬ身こそ侘つれ津の國の難波の浦を思ひやりつゝ
御むかへにまゐり給ふ道にて見給うて

尋ねくる心をまゐりて津の國のこふとも人のつぐるありけり

すけしては出家
してにて僧にな
りたるなりいき
ては行てなり

ありどもの馬のかみすけしてうぢ院にすむころ逢にい
きて

秋ふかみ霧立わたる朝あゝくもの森ある君をこそねもへ
中務の宮聞給うて

そむきにし跡をいかでか尋ねまし霧も立そふ雲のもりに
とわれバ

白雲に跡くらゝと行かげもどひもやするとおもひける哉
御かへし

諸共に契りし雲のすみかにいとへともたれを頼むあるらん
又宮より

秋深きねあじかざしのことのはい山下露やもらむとすらん
御かへし

常あらすまぐるゝ空の言の葉いもるとも露を何どかは思ふ

くらゝしきこと
めつらしきこと
ばなり暗々この
意にや万葉にく
れくさある同
無跡に心の殘
る意也

又

いふにだにまぐれん空のつれくど詠なからの後の思ひこそやれ
おちじ心を大どのに

世中を花の匂にさそはれてはかあき世をばあにたのむらん
かへし

よの中の花を花とや思ふらんそのはかあさる人ぞ知る
御かへし花山院のとも

かくれぬと何思ふらんその花は時のいたりて有にやの有ぬ
御かへし

その時をいづれの時とまらぬまのまつや常あき時や今こむ

左の大殿ハ御堂
關白道長公也此
哥後拾遺集雜五
にいでたり

左の大どの、春日の使に出たち給ひて又の日雪のふり
けるにその殿より

わかなたむ春日の原に雪ふれば心づかひをけふさへぞやる

御かへし

身をつみておぼつかあきの雪やまぬ春日の原の若菜也けり

宇治殿の八講に

水底に沈めるそこのいろくづを網にあらでもすくひつる哉
とありけるに

宇治河の網にあらねどたれのかの君に引れて浮ばざるべき

うへのきぬまう
したりしハ袍を
所望またりしな
るべし

かげまさが四位にありてうへのきぬまうしたりしつか
はすどて

ねなじごと衣のふかくかりにけり心ぞ我にあらひやのせぬ
みちさだがみちのくに、下るに妻のまきぶがやりける

歌をさし給ひて

いまさらに霞へだつるまら河の關をはじめて尋ぬべしやは
笛ふきのやしるを

ふえ吹のやしるの神の音にさく遊び岡にやゆきかよふらん

ねまの月の十
九日の夜の月
りふしまの月
さしあへり
たうの唐の字
なり此頃も音
しさいはす音
またいひし音
のうにひし音
るかなに書き
なるへし

拾遺雜秋に寂
かもしのこし
かり渡るに七
月七日舟にのり
侍りけるにひ
つかりしにひ
あつはしそひ
なし結句そひ
ななき舟出
しななき舟出
さなり

月の前の笛の音

月影にこちくの聲ぞきこゆあるふりにし妹の待やかぬらん
ねまの月の月を

ねてまつと今宵の月を言われは物思ふ人ひみてややみぢん
三河入道のたうにわたるとて白河にくだりけるにやり
給ひける

わが宿にやどる門出の行末は旅寐ごとにもわすれざらん
かへし

音にきくかうかの水のかへるとも白河の名をいつか忘れん
七月十日船にのるにやり給うける

天河後のけふだにはるけきをいつとも忘らぬ我ぞかなしき
たや寺の君のむすめどものもとに忘ろきかみにせみを
つゝみてはちすの花にさしてやり給うたりければ蓮の

いづれをかのせけきかたに頼まし蓮の露とうつ蟬の世と
かへし
蓮葉にうかぶ露こそたのまるれ何うつせみの世を歎くらん
又われより
蓮葉に浮ぶばかりの程あれやあべてたのまぬ玉のありかを
かへし
契あらば玉のありかも告あゝん此よの夢のうとくみゆとも
殿上にて琴ひき笛ふきあそび給うてれなじごとあそび
給ひける人殿上おきてまゐらぬに
笛の音のあはれ昔に似たれどもあふ事あさひかひなかり是
うちよりかへり給ふ日

花をつくりて此歌かきて蟬の中にさし入てたてまつり
たりける
いづれをかのせけきかたに頼まし蓮の露とうつ蟬の世と
かへし
蓮葉にうかぶ露こそたのまるれ何うつせみの世を歎くらん
又われより
蓮葉に浮ぶばかりの程あれやあべてたのまぬ玉のありかを
かへし
契あらば玉のありかも告あゝん此よの夢のうとくみゆとも
殿上にて琴ひき笛ふきあそび給うてれなじごとあそび
給ひける人殿上おきてまゐらぬに
笛の音のあはれ昔に似たれどもあふ事あさひかひなかり是
うちよりかへり給ふ日

こも枕の夜殿さ
つづく枕詞にて
淀の波に用ひた
るなり

こゝろだにゆきはてぬればこも枕よどの渡の近づきぬらん
人におくれて世中すさまじうおぼされけるころ白川に
ればして

白河の宿にうき世をのがるれをまづめる影の猶ぞみえける
女御のよりきこえ給うける御かへしに

ここの葉をかき流しつゝ白河の水のおもてをけふみつる哉
うへの尼にあり給ひたりける頃

殿の少將の教通
公大殿の道長公
なるへし

空蟬の世の常なきを去りあがらんとひがたきわわが涙かき
岩清水臨時祭のつかひ殿の少將舞人にてわたり給ひけ
るに大殿の物見給ひけるに聞え給うける
をみ人のゆふかたかけてゆく道をおまじ心に誰かがむらん
かへし

世すさまじうて
何か世中を面
白からす思ふ事
のありてなり

小忌衣袂にきつゝいはまみづ心をあべてくまずもわらあん
世すさまじうてこもりぬ給へるころ大殿より春のこと
あり

谷の戸をとちやはてつる鶯のまつに聲せではるもすぎぬる
御かへし

行かほる春をもまらず花さかぬみ山がくれのうぐひすの聲
おまじ殿れもくわづらひ給うて大殿に

歎ふれば同じよはひの草かれや露におくれて先ぞかれぬる
同じ御年ありける

圓融院の御時にや宇都保のすゝし仲忠といづれまされ
るところにけるにまのしひすゝしが方にや有けむ女一
宮の仲忠が方におはしけるにやいづれをいるゝあま
るに物あひそと仰せられければともかくもいはでお

み山はたゞ山の
事なれりこゝの
身をかれたり
同じ御年なりけ
るは歌に同じし
さあるをともて
長公の公任卿の
人の書入しなり
すゝし仲忠の共
に宇津保物語に
みはたる人なり
けるなり

ふつくられける
には詩賦なるへ
し詩をのらうた
さはいはでふみ
く見たり

はしけるをいひにねこせ給うければ
沖津きみ吹上の濱に家ゐしてひとりすしと思ふべしや
權中納言筆に扇をかへていくつばかりにかわたるべき
といひたるを
かきまらさあふぐ風にも水蒸の跡のあがれて絶むものか
せきみの少將春日の使したまひてかへり給ふ日いみじ
う霧のたちたりければ是より大殿に
三笠山春日の原の朝霧にかへりたつらん今朝をこそおもへ
御かへし
みかさ山麓の霧をかきわけて秋を去るべにいまやきぬらん
左の大殿にふみ作られけるにみるべき事ありてふみも
かきていそぎかへり給へるに彼殿よりすきはち
うらめしや今宵ばかりのたびねをわが宿にたゞ草枕せで

おひしこそそのこ
き心地す

うれふ事いふ
なり事さう
るやちまたに
るを見たるへし

御かへし
おひしこそよゝに契れる吳竹の其あだふしを恨むべしや
少納言むねまさが法師にちりて志賀にあるに
さい浪やまがの濱風いかばかり心のうちいすいしかるらん
同じ人のもとに久しう音もま給ひざりければ
奥山の木下かけにすむ人の月さへどはぬものにぞありける
かへし
かく山の木下水のきよからばもりても月のかよひざらめや
清少納言が月輪にかへりすむ頃
在つゝも雲間にすめる月の輪をいくよながめて行歸るらん
返事もきこえでせへてうれふ事ありて御文を聞かて
其事いかにと聞えければ
何事もこたへぬごとく習ひにし人どまろく問ふや誰ぞも

たふなきの答の
字音よや
昔菊の仁明天皇
のころに愛給ひ
しより承和菊と
もいへり山梔子
色なれば口無に
さりなしてよめ

天つ空の禁中を
いへり豊明節會を
いふ

かへし

たふなきの苦しき物とあらひして人の上をば思ひまらさん
どてあんどあれは黄なる菊にさして

口赤しの色にならひて人ごどをきくとも何か問んどぞ思ふ
かへし

押あべてきくとしも社見えざらめこの厭はしき方にさけかし
さねよりが甲斐に有けるに

東路にいりにしひとを思ふよに都あがらもきえぬべきかあ
さねより

はるかある雲井の程のひとことのみるに時雨ぞ降増りける
左大將朝光五節の舞姫たてまつりけるを見てつかはし
ける

天つ空豊のあかりにみし人のなやおもかげのまひて戀しき

そののみか前方
の意に神を兼た
り
葵に逢日なけれ
たり

いつか何時か
に五日なけれた
り

寛仁の後一條院
の年額なり
入道太政大臣の
道長公なり

住馴じかし一本
にすみなれずや
なと申したりけ
ればとあり

齋院にて物申しける人内わたりにまゐれるよしきよて

あふひにかきつけてつかはしける

年ふれを變らぬ物のそのかみに祈りかみけてしあふひ也鳥

五月五日に遣はしける

時鳥いつかどまちしあやめ草今日いにかあるねにか鳴べき

かへし馬内侍

五月雨の空おぼれする時鳥どきにさく音のひともとかめず

寛仁二年正月入道前太政大臣大饗し侍りけるに屏風の

繪に山里に紅葉みる人きたる所

山里の紅葉みにどやおもふらん散果てこそとふべかりけれ

世をそむきて長谷に侍りけるころ入道中將のもとより

まだ住あれじかしあど申されけれは

谷風にあれずといかと思ふらん心のはやくすみにしものを

秋のくれつ方白河にまかりて
 都出ていつかきぬらん山さどのもみぢ葉見れば秋暮にけり
 長谷に侍りける頃僧の装束法服を關白殿よりおくら
 るとて

いにしへの思ひかけきやとりかはしかく着ん物と法の衣を
 かへし

同じ年ちぎりしあれば君が着るのりの衣をたちおくれめや
 同じ年の人にあん

後朱雀院生れさせ給ひて七夜に

いとけなき衣の袖のせばくともこふの石をバあで盡してん
 題まらす

わが宿の梅のさかりにくる人の驚ろくばかり袖ぞにはへる
 歎く事侍りけるに紅葉のちるを見て

白の道長公は法
 體なるに公任卿
 もこたひ又法卿
 になられたまへる
 也
 たちかくれめや
 は裁は立なかれ
 たり

初石は佛經の
 故事なり

宣方朝臣一本に
 實方初臣さあり
 なさかく云々
 なせ御さそひ下
 されさりしそ此
 次に御出の時ハ
 必御供願ひたし
 必宣方よりいひ
 せせられし也

紅葉にも雨にもそひてふるものいむかしをこふる涙也けり

世の中はかなき事多かりける頃いひ絶たる女に

逢みねど忘れぬ人のつねよりも常なきをりぞ戀しかりける

花のさかりに藤原爲頼さどもあひて岩倉にまかれり

けるを中將宣方朝臣さどかく侍らざりけむ後の度だに

かあらずときこえけるを其年中將も爲頼もみまがりに

ける又の年かの花の頃中務卿具平親王のもどより

春くればかりにし花も咲にけり哀わかれのかゝらましかば

かへし

ゆさかへり春やあはれと思ふらん契りし人の又もあはねば

公任卿集終

佐々木弘綱
佐々木信綱

標註

紫式部家集
清少納言家集

東京

博文館藏版

紫式部集

佐々木弘綱
標註

同 信綱

はやうより童友だちありし人に年頃經て行あひたるが
 年のかにて十月十日のはせ月にきはひて歸りにけれバ
 めぐり逢て見しやそれ共わかぬ間に雲隠れにし夜半の月哉
 その人遠き所へ行くかりけり秋のはつる日きたる曉に
 虫の聲あはれかり
 あきよわるま垣の虫もどめがたき秋の別やかあしかるらん
 さうのことあはしといひたりける人まゐりて御手より
 えんとある返事に
 露まげき逢が中の虫のねをおぼるげにてやひとのたづねん

十月を新古今集
 に七月とあり百
 首異見云家集に
 十月とあるハ七
 月の寫誤なるべ
 し月なきはひて
 ざるハそりる
 ぐ方にていさ涼
 しき月のけしき
 み白晝の暑さを
 さけて暮るを待
 あへすいそぎ物
 せし也歌のさうへ
 も短夜のさまか
 なふべし

なまおほくし
きいたざくし
くたしかならぬ
意也

なかるい泣
るいに洗るい
そへたり

かきたえの
助群にてた
絶ゆる意な
これハ書く
かれたり

つゆもい露にす
ねたり

なかん一本に
かなんさある方
まさりさまに
ほ

みけさみの髪
の顔にかいらぬ
やうに扱みたる
しをいへるなるべ

方たがへにわたたりたる人の奇まればくしき事ありて
歸りにけるつとめて朝がやの花をやるどて

かぼつかあそれかあらぬか明ぐれの空おぼれする朝顔の花
かへし手をみまかざるよや有けん

いづれぞと色わくほどに朝顔の有かあきかにあるぞ悲しき
つくしへゆく人のむすめの

西の海を思ひやりつゝ月みればたゞにあかるゝ頃にも有哉
かへし

にしへ行く月の便に玉づさのかきたえめやの雲のかよひぢ
はるかある所にゆきやせんゆかすやとおもひわづらふ

人の山里より紅葉を折てれこせたる
露ふかきおく山里のもみぢ葉にかよへる袖の色を見せばや
かへし

嵐ふく遠山里のもみぢ葉のつゆもとまらんことのかたさよ
又その人の

もみぢ葉をさそふ嵐のはやけれどこの下からでゆく心か
物思ひわづらふ人のうれへたる返事に霜月ばかり

霜氷どぢたるころの水ぐさのえもかきやらぬ心地のみして
かへし

ゆかおともなはかきつめよ霜氷水の上にておもひながさん
賀茂にまうでたるに子規あかんどいふ明ばのかた岡
の梢をかしうみえけり

杜鵑こゑまつ程のかた岡のもりのまづくにたちやぬれまし
やよひの一日河原に出たるにかたはらある車に法師の
かみをかうぶりにてはかせたちをるをにくみて

はらへどの神の飾のみてぐらにうたてもまがふみはさみ哉

なきがかりに
云々の互に亡き
人の思ひに兄弟
の思ひはさ
んこの意也

かへる山は越前
國にあり

津の國云々
遠維上に津の
にまかれりける
時都なる女友
の思ひに遣はし
けるさあり

返歌原本にみえ
す楳拾遺にのみ
ゆねば考ふるに
よしなし

わぬきりし人きくあり又人のねど、うしきひたるかた
みに行わひてききがかはりに思ひかひさんといひけり
文の上にあぬきみどかき中の君どかきかよひしけるが
れのがじ、遠き所へ行別る、によそあがら別をしみて
北へゆくかりの翅にこどづてよ雲のうはがきかき絶すして
かへし西のうみの人あり
行めぐり誰も都にかへる山いづかたときくやどのはるけさ
津の國といふ所よりれこせたりける
難波がたむれたる鳥の諸共にたちゐるものと思ひましかば
かへし
筑紫の肥前といふ所より文おこせたるをいと遙かる所
にてみけりその返事に

松浦の肥前國に
あり

きたる一本きた
りさあり
松浦に待を
なり結句の下に
誰に事あらぬそ
なけつ事新心を
れけつ意をふく
みたり

三尾の崎近江の
湖水にあり万葉
九の巻に思ひつ
てくれさ來か
りか三尾の崎ま
みつ浦を又かへ
り

ひらめく一本
神きらめくにさ
あり

津山江國
磯津山江國
からき道なりや
路であら難義の
意にてやハ歎辭
なり

わひみんと思ふ心のまつらあるか、いみの神や空にまゐらん
かへし又の年もてきたる
行めぐり逢をまつらの鏡にいたれをかけつ、祈るとかま
近江のみづ海にて三尾が崎といふところにあみひくを
見て
みをの海に網ひく民の隙もあきたちゐにつけて都こひしも
いそのはまに鶴の聲々にあくを
いそがくれ同じ心にたづぞあくあがおもひ出る人の誰ぞも
夕立まぬべしとて空のくもりてひらめくに
かき曇り夕だつ浪の荒ければうきたる舟ぞまづこゝろあき
まほつ山といふ道のいとまげきをまづのをのあやしき
さまをもして猶からき道なりやといふをきゝて
知ぬらん往來にならすまほつ山世にふる道のからき物ぞと

水海ハ琵琶湖也
童部浦ハ近江蒲
生部白部村奥崎
の邊なりと云

松一本山とあれ
こよるしからず

小鹽山山城愛宕
郡にあり

猶俗音にマア
さいふに同じし
ゆきもゆきに行
なかれたり

水うみにあいつ嶋といふ洲さきにむかひてわらはへの
浦といふ入海のをかしきをうちずさみに

老津嶋まもる神やいさむらん浪もさわがぬわらはへの浦

こよみに初雪ふるとかきたる日めに近きひのゝたけと

いふ山の雪いとふから見やらるれば

こゝにかく日野の杉村埋む雪をしはの松に今日やまがへる
かへし

をしは山松の上葉に今日やさいみねのうす雪花とみゆらん

ふりつみていとむつかしき雪をかきすてゝ山のやうに

まきたる人々のぼりて猶これ出て見たまへといへば

故郷にかへる山路のそれあらば心やゆくとゆきもみてまし

年かへりてからひとみにゆかんといいひける人の春のと

くる物といかであらせたてまつらんといいひたるに

野洲

やすの港夫木集
に八十の港とあり

うたふの歌繪也
或説にやこいふ

に矢を繪にき
わさふに歌繪を

ふかきて歌繪を
いふ少へり声

手さひしく異
なれり俗には人

じ物といふに似
たるもの也

なげきの焼木を
いふさて歌を

かいたり
文をよしけりハ
しを云

春あれどあらねのみ雪いや積りとくべき程のいつとあき哉

近江の守のむすめにけさうすとさく人のふたごゝろあ

しあせ常にいひわたりければうるさくて

水うみに友よぶ千鳥ことあらばやすの港をこゑたえあせそ

うたゑに海士の掬やくかたをかきてこりつみたるあけ

さのもとにかきてかへしやる

四方の海に掬焼蟹の心からやくとのかゝるあげきをやつむ

ふみのうへに朱といふ物をつぶくどそゝぎかけて涙

の色をとかきたる人のかへしに

紅の涙にいとらとまるゝうつるこゝろのいろとみゆれば

もとより人のむすめを得たる人ありけり文ちらしけり

ときゝてありし文せもとりあつめておこせずの返事か

ゝじとことばにてのみいひやりければみあおこすとて